文部省檢定濟

文學博士 中村孝也 著

女子 新合綜國史

高等女學校上級用

株式會社
帝國書院

42974
教科書文庫
4
210
42-1938
20000
81617

資料室

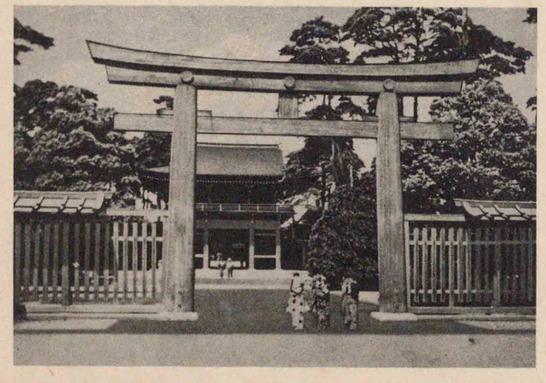
濟定檢省部文
昭和十三年三月九日高等女學校歷史科

教科書文庫
4
210
42-1938
2000081617

東京帝國大學教授
文學博士
中村孝也著

女子
新合綜國史

高等女學校上級用



宮神治明

広島大学図書
2000081617

帝國書院
株式會社

4b
210
BB13

広島大学
教
81617
図書

小序

本書は昭和十二年三月改正せられたる高等女學校歴史科教授要目に準據し、主として修業年限四年制の高等女學校用として編述したものであります。該要目は國運の進展に鑑み、國體の本義を明徴にし、國民精神を涵養することを旨として制定せられたものであります。この要旨を實現するためには、先づ指導精神を確立し、これに基いて教材の選擇・排列を行ふことを要します。その指導精神は、(1)道德的使命よりいへば、國體の本義を明かにし、健全なる國民精神を養ひ、皇室中心のわが國家を一層立派に護り立てる決心を強からしめ、(2)學術的使命からいへば、わが國民文化の大系を明かにし、一層立派な世界文化を創造する覺悟を強からしめることに存します。本書はこの指導精神に從ひ、(イ)特に御歴代の聖德と國民の忠誠とを述ぶることに重きを置き、(ロ)既に國史及び外國史の大要を修得せしめたる後を承けて、諸外國と比較して、わが國體の世界無比なる所以を悟らしめ、以て大義名分を明かならしめることに意を用ひ、(ハ)またわが國が如何に外國文化を攝取醇化、

し、新たなる文化を創造せしかを說き、(ニ)且國民の活動が如何に國運の進展に關係ありしかを理解せしめ、(ホ)人文の發達・社會の進展は、政治・經濟その他の文化の相互聯關に依るものなることを明かにし、(ヘ)各時代の特色を把握せしめることに留意し、(ト)特に女性が社會・國家の進展に貢獻せることを述べ、(チ)現代の情勢の下における日本婦人の思想態度に就いての覺悟を喚起することに心を用ひ、要するに低學年における國史教育を基點(キテン)として、更に前進して內容を擴充(クワクジユウ)し、新鮮(シンセン)なる教材を提(テイ)供(キヨウ)し、國史の理解と興味とを增さしめることに努めました。

尙、本書を修業年限五年制の高等女學校においてこれを採用せらるゝ場合には(1)大陸文化の攝取・外來文化の醇化・尊王思想の勃興と明治維新・立憲政治の確立の各章を詳述し、(2)その他の各章中割合に重要と思はれる教材を詳述して、規定の時間數に適合するやう敷衍せられんことを希望します。但、その爲めには別に「女子綜合新國史高學年用」もあります。また本書は、姉妹篇たる小著「女子綜合東洋史」・「女子綜合西洋史」と密接な關係を保ちつゝ編述したものであります。

昭和十三年二月

中村孝也識

女子綜合新國史　高等女學校上級用

目次

第一章　肇國と國體の精華……一
第二章　社會組織と國民道德……一〇
第三章　大陸文化の攝取……一五
第四章　外來文化の醇化……三〇
第五章　武士の勃興……四一
第六章　建武中興……四八
第七章　東山時代の文化……五八
第八章　社會の革新……六五
第九章　文敎の振興……七一
第十章　尊王思想の勃興と明治維新……八九
第十一章　立憲政治の確立……一〇三

第十二章　教育勅語の御下賜と現代文化の發展……二八
第十三章　現代の大勢と女性の覺悟……一三〇

女子綜合新國史

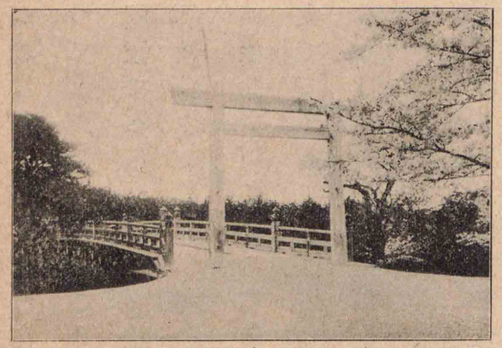
高等女學校上級用

第一章　肇國と國體の精華

序說

優秀なる國體

萬世一系の天皇と忠良無比の國民



皇大神宮宇治橋

序說　われ等は曩に、わが國史を學んで神代より現代に至るまで數千年間における國運發展の道筋を明かにし、それより轉じて東洋史と西洋史とを修めて、世界各國の起つたり倒れたりした跡を眺めた。その間に知り得たことは、わが國體と、わが國民性とが、共に最も優秀なものであるといふことであつた。(1)わが大日本帝國は、上には萬世一系の天皇

卓越せる國民性
強大なる同化力

がおはしましてこれを統治したまひ、下には忠良無比の國民があつて皇運を扶翼しまゐらせ、天壤とともに窮り無き生命を有する國家である。その國體の鞏固にして高貴なることは、諸外國が簒奪や革命によつて、頻りに主權を取換へ、數十年若くは數百年の短い生命を以て終るのに比ぶべくもない。而して(2)この國家を組立ててゐる日本國民は、實に驚くべき強大なる同化力を有してゐる。日本國民は、祖神崇敬の信仰を中心として立ち、長い年月に亙つて東洋文化を取入れ、また西洋文化を取入れ、すべての外來文化を同化してわが血となし肉となし、成長發達して今日に至り、將に雄大なる世界文化を創造しようとしてゐる。されば、われ等は今や再びわが國史に歸るに方り、今まで學んで來た國史・東洋史・西洋史の知識を、悉く綜合して大觀すると共に、左には國體の歷史的基礎を尋ね、肇國の大精神を宣揚して皇室中心の國民生活をいよい

綜合的大觀
國體の歷史的基礎
外來文化の同化

よ堅實ならしめ、右には固有の國民信仰を求め、外來文化を取入れた次第を明かにして、わが國民性の特質であるところの強大なる同化力に對して、ます〳〵信賴の念を大きくし、それによつて國運を發展させ、世界人類の幸福を增すことに力を盡さうと思ふのである。

天照大神の神勅

天照大神の神勅

神代の昔、皇祖天照大神は、皇孫天津彥彥火瓊瓊杵尊を、わが大八洲國に降したまふに當り、

豐葦原千五百秋之瑞穗國は、これわが子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫、就きて治らせ。行きくませ。寶祚の隆えまさんこと、當に天壤と窮り無かるべし。

同床共殿
三種の神器

といふ神勅を賜はつた。また八咫鏡をとつて「この寶鏡を見ること、尙、當にわれを見るが如くすべし。床を同じくし、殿を共にして以て齋鏡となすべし」と宣ひ、天叢雲劍・八坂瓊曲玉と共に、これを授

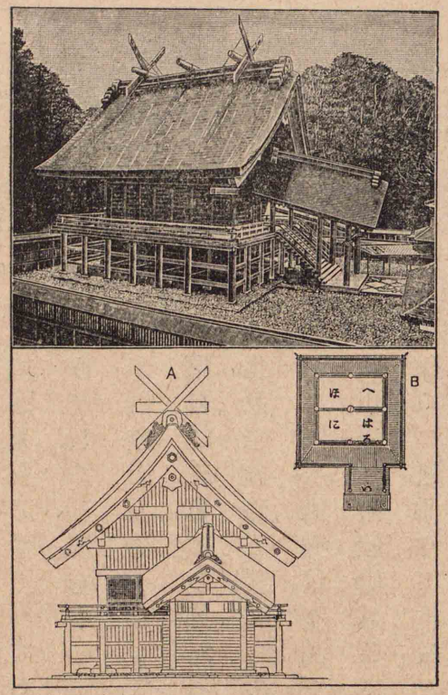
けられて、永く皇位の御しるしとなさしめられた。瓊瓊杵尊は謹みて神勅を奉じ、この國に降臨あらせられた。この神勅によつて、わが國は肇められたのであつて、その精神の雄大なことは、東西古今、これに比ぶべきものがない。

血族的結合より見たる國體

血族的結合より見たる國體　わが國は肇國のはじめにおいて、血族的結合と精神的結合との二大基礎を有してゐる。先づ血族的結合の方からこれを見れば、日本民族は日本群島の上に住み、長い年月の間に血統が結びついて、素質のよい民族になつた。その中心にお立ちになられたのが、皇室でいらせられ、その御血統は、遍く國民全體に行きわたり、つひにすべてが同一祖先から生れて出た血族同士になつてしまつたのである。その祖先は卽ち天照大神でいらせられる。かくして皇室と國民との間は、譬へば大木の幹と枝とのやうな關係となり、我々といへども、その血統を尋ねれば、遠い昔において、畏れ多くも皇室から分れて出たものとなるのである。我々の苗字は無數であるが、主なる血統でこれを纒めて、源平藤橘と呼びならはしてゐる。源氏の中では清和天皇から出た清和源氏、平氏の中では桓武天皇から出た桓武平氏が共に最も榮え、藤原氏は天照大神に近い天兒屋根命から出で、殊に中世以後、皇室との御血緣が極めて密接であり、また橘氏は、敏達天皇の御裔である。されば幹より大枝、大枝よりだん〳〵小枝に分れ、その先に

民族の中心としての皇室

皇室と國民との關係



出雲大社正殿・正立面及び平面

出雲大社は出雲國簸川郡大社町に在る官幣大社である。この圖の上段は本殿の全景、下段Aはその正立面圖、Bは平面圖である。圖中(へ)は御神體を安置したてまつるところ(い)の階段を登り(ろ)より入り(は)(に)(ほ)を經て(へ)に至る順序である。この建て方を大社造といふ。

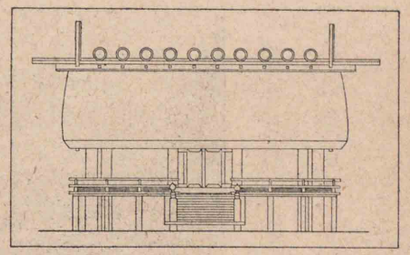
源平藤橘の起り

神明造は、正面に四本の柱を立て、柱の間を三間とし、その中央一間を入口とし、側面には三本の柱を立て、屋根は切妻造で破風の下に棟持柱のある建物である。

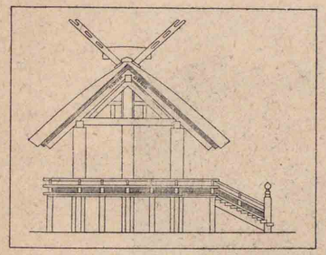
君民一體の國家

精神的結合より見たる國體

神格と人格



神明造正立面



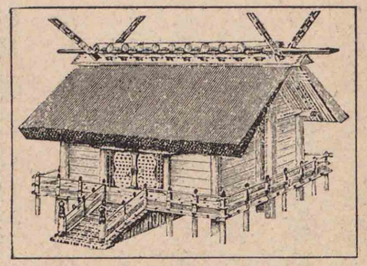
同側立面

葉がつくやうに、日本國民はすべて皇室の御血統から分れて出たものであつて、皇室の御祖先は卽ち國民の祖先であり、君民一體となつて國家を形づくつてゐるのである。このやうにして皇室を中心とする血族的結合がわが國體の基礎となつてゐるのである。

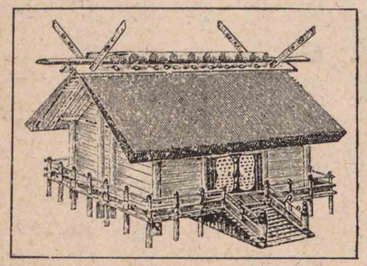
精神的結合より見たる國體　昔の日本人は、生命を肉體と靈魂との兩方から見て、肉體は滅びても靈魂は不滅であると考へてゐた。故に祖先の肉體は滅びても、その靈魂は永く子孫につき添うてゐると信じ、そこで祖先を神として敬ひ、祖神崇敬の信仰をもつことになつた。卽ち祖先は、いづれも神格(神の性格)

現人神

國體の精華



皇大神宮正殿



豐受大神宮正殿

をもつものとして尊敬せられてをり、子孫はそれが薄らいで、つひにたゞ人格(人の性格)だけをもつものになつたと考へた。しかしひとり天皇のみは、祖神直系の御神裔として、いつまでも神格を有せられるのである。國民はこれによつて天皇を現人神と申して尊び敬ひ、天皇は神格を有して國家を統治せられるのである。このやうにして皇室を中心とする精神的結合が、またわが國體の基礎となつてゐるのである。

國體の精華　血族的結合からは、身體の生命の源をなす祖先崇拜の情を生じ、精神的結合からは心の生命の源をなす神祇崇拜の情

日本人の精神

祭政一致

を生ずる。この崇祖(祖先崇拜)と敬神(神祇崇拜)とが合して生じた祖神崇敬の信仰は、實に我々日本人の根本精神を形づくるものである。この精神が土臺になつて祭政一致の風が起つた。祭政一致とは祖神を「マツル」(祭る)ことが卽ち「マツリゴト」(政)であるといふ考である。この政教の合體は、實にわが國體の精華である。

諸外國との比較

支那

革命

諸外國との比較　諸外國の國體はわが國と異り、上述せるごとき基礎を有してゐない。(1)今、東洋史の中心をなす支那に就いてこれを見るに、支那は古より諸民族の競爭が絕えず繰返され、多くの國家が起つたり倒れたりしたのであつた。その起つたり倒れたりする原因を押詰めて見れば、それは權力の强弱に基くのである。支那の歷朝は、このやうにして移り變つて來たのであつて、その移り變りを革命といつてゐる。わが國民は夙くからこのことを知り、わが國體の尊嚴なることを誇となした。興福寺の僧侶の

西洋諸國民族競爭

わが國體の優秀

作れる歌の中に、天皇の神聖なることを讃へたてまつりて、「君ごとに現人神と、なりたまひおほましませば、四方の國、隣の君は、百つぎにつぐといふとも、如何でか齊しくあらむ」とあるのは、卽ち國體の正しい自覺から出た言葉である。(2)西洋史に見える多くの國々も亦、激烈なる民族競爭の渦卷の中で、起つたり倒れたりして來たのであり、共和國のごときは、人民が權力を有し、法律の力を以て國を建ててゐるのである。亞米利加合衆國は、法を以て治められる國家の一例である。このやうな次第で、西洋諸國には、わが國のごとき安定性が無い。さればわれ等は諸外國と比較して、わが國體の優秀なることを明らかに認識し、この國土に生れたことの幸福を感謝しつゝ、君國のためにすべてを捧げて働かうと決心するのである。

氏族制度

氏族の意義

氏上と氏人

部曲

氏族と職業

農業氏族

地名と氏の名

第二章　社會組織と國民道德

氏族制度　わが國體の基礎となれる血族的結合は、氏族制度と呼ばれ、古代の社會組織を組立ててゐるのであるから、茲にこれに就いて詳しく述べることとする。氏族とは、同一の祖先から分れて出た血族團體をいふ。氏族には族長と族人とがあり、族長を氏上といひ、族人を氏人といつた。氏族はまたこれに隷屬する人民を有してゐた。これを部曲といつた。部曲の民は主として勞作に從事するものであつた。氏上は氏人及び部曲を率ゐて、朝廷に奉仕したのであつた。

氏族と職業　わが國では、古から農業が主要な產業であり、氏族團體の大部分は農業に從事してゐた。このやうな氏族には地名を以て氏の名とするものが多かつた。葛城氏・難波氏・平群氏・高市

工業氏族

職業と氏の名

一百八十部

土地と人民との所屬

領有と統治

統治權の普遍的性質

氏などいふ類である。その外、工業に從事する氏族團體もあり、その職業を以て氏の名とするものが多かつた。鏡作氏・玉造氏・弓削氏・矢作氏・服部氏・土師氏のごとき類である。農業も工業も、すべて世襲であり、それ〴〵部曲の民が、勞作に從事した。この種の部曲の數は甚だ多いから、これを總稱しては百八十部といつた。

土地と人民との所屬　氏族は、それ〴〵土地と人民とを所有し、族長たる氏上は、これを統べて皇室に仕へた。皇室もまた諸所に土地と人民とを所有してをられた。かくして天皇は一面には皇室に直屬する土地と人民とを領有せられると同時に、他の一面には、すべての氏族團體に屬する土地と人民とを統治あらせられた。統治權は太陽の光の隈なく照らすがごとく一寸の地、一人の民をも漏らしたまふことがない。これを古語には「普天の下、王土にあらざるはなく、率土の濱、王臣にあらざるはなし」と稱してゐる。

姓の制

臣・連・直・首・造

大臣
大連

皇別と神別

氏と姓との變遷

氏と姓との關係の紛亂

盟神探湯

八等の姓

姓の制　氏の格式の尊卑を示す名稱を姓といふ。政府を組織するのに別に官制といふものがなく、姓の制によつて官職の高下を分つた。姓には臣・連・直・首・造等の別がある。いづれも皇室より賜はるものである。姓の中で臣と連とは最も貴く、臣は概ね皇別の諸氏に賜はり、連は概ね神別の諸氏に賜はつた。臣連の中から特に選ばれて大政に與るものを大臣・大連といつた。

皇別とは神武天皇以後、皇室より分れて出た氏族であり、神別とは神代において、諸神より分れて出た氏族である。

氏と姓との變遷　姓はもと氏に具はつて、その社會上における身分の尊卑及び政治上における官職の高下を示すものであつたが、歳月を經るに隨つて、氏と姓との關係が亂れて來たから、允恭天皇のとき盟神探湯を行つてこれを正したまひ、後、天武天皇のとき、新に眞人・朝臣・宿禰・忌寸・道師・臣・連・稻置といふ八等の姓を定められ

位階

苗字

盟神探湯

國民道德

皇室中心の國民思想

た。これは、その人の社會上の身分の尊卑を分けたものであつて、氏に具はつた名稱ではない。また別に位階の制を正して、官職の高下を分けた。氏は子孫が繁榮し、一族が增加するのに隨ひ、更に稱號を分つ必要がおこり、新に苗字といふものを生じた。

盟神探湯といふのは、神意裁判であつて、神前において正直を盟ひ、熱湯の中に手を入れるのである。若しその人が正しければ、手は爛れないと信ぜられてゐた。

國民道德　氏族制度によつて組立てられたる古代の社會組織において、皇室は、すべての結合の中心でいらせられた。故に國民は常に皇室を仰ぎまゐらせ、天皇の統治權の下にあつて、安んじて生業に從事し、皇室を戴き、國土を護り、國民生活をして健全なる發達を遂げしめることに力を盡したのであつた。その上、祭政一致により、天皇はたゞに統治權を總攬して政治の中心に立たせられるばかりでなく、祖神の祭祀に當らせられて教化の中心に立たせ

天皇は神聖にして侵すべからず

たまひ、國民は政教兩面の中心として天皇を仰ぎまゐらせたのである。「天皇は神聖にして侵すべからず」といふ精神は、實に國民思想の根柢をなすものである。皇室は、このやうな絶對の高い立場にをられて、その御仁愛は氏族の末々にまで及び、君民の間は、父子のごとき親しさを以て滿ちてをつた。

古典と國民道德

古典に見える神話・傳說・歌謠などは、古代の純粹なる日本精神を傳へて、わが國民道德の正しい姿を示してゐるのである。

大伴家持の歌

それは一言にして掩へば、臣民たる責任の全部を一身に負ひ、すべてを擧げて君に捧げ盡す精神を中心とするものであつた。大伴家持が「海ゆかば水漬く屍、山ゆかば草蒸す屍、大君の邊にこそ死なめ、顧みはせじ」と述べ、梓弓手にとりもちて、劍太刀腰に取り佩き、朝守り夕の守りに、大君の御門の守り、我れを措きてまた人はあらじ」と聲高らかに歌つたのは、卽ち臣道精神の精華を强調したものであつた。

臣道精神の精華

古代の產業

農業

食物

工業

第三章　大陸文化の攝取

農夫の土偶

古代の產業

わが國は四方に海を環らせる細長い群島國であり、到るところに山脈が連り、森林・原野・河川・湖沼が多いから、漁業や、狩獵や、牧畜や、農業のやうな產業が行はれてをつた。殊に農業は最も主要なるものであつた。

上代の食物は、植物性食料では、米が最も主要なものであつた。麥・粟・豆などの穀物・蔬菜その他果物・海草等も食用とせられた。動物性食料では、鳥獸魚貝等の肉が用ひられた。

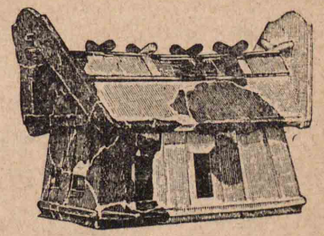
工業は幼稚な手工業であり、機織が行はれ、武器や、食器や、日用家具類が作られ、天地根元造といふ住宅建築が營まれた。

衣服

衣服の原料は、植物の纖維を以てつくつたものには、麻で織つた麻布、穀で織つた楮が多く行はれた。動物性のものでは絹があつた。

家屋

家屋は天地根元造といふ頗る簡素なもので、地を掘つて柱を建て、梁や桁は藤・葛などで結び、屋根は茅などで葺き、千木・堅魚木を備へてゐた。出雲大社の大社造は、この系統の建方の最も立派なものである。



埴輪家屋

商業

商業は部落毎に、主に自給自足の經濟生活を營んでゐたので、殆ど見るに足るべきものがなかつた。

自給自足の經濟生活

交通機關

交通機關には、舟や車はあつたが遠行に堪へるものではなかつた。

車・舟

しかしやがて交通の範圍が廣くなるにつれ、物資の交換が行はれ、商業が發生し、市場も出來たが、一般に極めて幼稚であつた。

神功皇后と古代文化の發達

神功皇后と古代文化の發達

古代の産業は、ほゞこのやうな有様であつたが朝鮮及び支那との交通の開けるに隨ひ、更に著しく

進んだ。

朝鮮との關係

朝鮮との關係は古來密接であつた。殊に神功皇后御遠征の後、その文化は盛んにわが國に流れ入るやうになつた。

神功皇后の御遠征と文化の發達

神功皇后は、夙に新羅の文化の進んでゐることを知りたまひ、その都に入られては、圖籍文書を收め、綾羅縑絹等を貢せしめられた。これは朝鮮より精神的文化と經濟的文化とを取入れられたのであり、皇后の御遠征はわが古代文化の發達の上に一つの時期を劃せられてゐる。

産業の進歩

産業の進歩

先づ經濟的文化に就いてこれを見れば、これより後、弓月君は百二十縣の民を率ゐて歸化し、百濟王は縫衣女工を上り、鍛冶・裁縫等の工人も亦朝鮮から內地に來た。

歸化人

弓月君の子孫は秦氏となり、養蠶・機織の業を以て朝廷に仕へた。

秦氏

南支那との交通も古くから存し、その地方から應神天皇の御代には、縫工兄媛・弟媛・吳織・穴織が來り、雄略天皇の御代には、手末才伎漢織・吳織及び衣縫

兄媛・弟媛が來り、それ〴〵裁縫・機織などを傳へた。

儒教の影響

儒教の影響　次に精神的文化の方面を見れば、儒教と佛教とが傳來して、わが國民思想に大きな影響を與へた。儒教は支那の孔子の開いた教である。その教は孝と悌とを重んじ、家族を大切にし、その心を推しひろめて、國を治め、天下を平かにする道を說いたものである。この考へ方はわが國の美風たる祖神崇敬の思想と合するところがあつたから、應神天皇の御代、百濟から、その經典たる論語が獻ぜられたとき、素直に取入れられ、その後儒教は永くわが國民道德を養ひ育てるために働いて今日に至つてゐる。

家族本位の道德

儒教の傳來

佛教の影響

佛教の影響　佛教は印度の釋迦牟尼の開いた教である。これを取入れてわが國の文化を養ひ育てる道を開かれたのは聖德太子でいらせられる。太子の有つてをられた思想は、國家本位の見方であつて、敬神を主とし、右には儒教を、左には佛教を取入れられ

聖德太子の家思想

たのである。故に太子より後、佛教は次第に國家化せられ、神佛習合の風が盛んになり、また鎌倉時代には、淨土宗・眞宗・法華宗のごとき、新たな宗派が生ずるに至つた。

聖德太子

飛鳥時代の藝術

飛鳥時代の藝術　更に藝術に就いていふならば、支那文化と佛教文化との影響を受けて、わが素樸な藝術は、推古天皇の頃から、俄かに盛んになつた。その頃を飛鳥時代といふ。大和の法隆寺の建築及びその中にある佛像彫刻などは、その時代の特色を示すものである。

外來思想の日本化

外來思想の日本化　大陸から輸入せられたる學問宗教は多くの優れた文化內容を有してゐるので、わが國民は、これを攝取し、こ

國體の本質的差異

儒教と忠孝

佛教の國家化

れを同化し、これを榮養となして、自分の生命を成長發達せしめたのであつた。けれども大陸の諸國の國體は、わが國と異るところがあるから、わが國民は能くこれを認識し、わが國に適合する部分を取り、これに適合せざる部分を捨てることの用意を忘れなかつた。例へば儒教は家族生活を重んじ、孝を以て百行の本となし、延いて祖先に對する大孝の貴むべきことを教へ、また國家生活を重んじ、君に忠なるべきことを教へてゐる。これはわが國の祖神崇敬の思想と合する故に、直に採用したけれども、わが國は血族によつて結合した國である故に、忠の内に孝が含まれてをり、君に忠なることが卽ち親に孝なることであり、忠君を以て第一とするのに反し、支那では孝の方を重んずる傾向があるから無批判に儒教を取入れることをしなかつたのである。また佛教は靈魂の不滅を唱へ祖先の靈を祭ることを重んじてゐる。これはわが國の祖神

祖神崇敬の信仰

強大な同化力

外來文化の同化

崇敬の思想に合する故に採用したけれども、その世界教たる本質を變化させて、わが國に適當なる國家教たらしめ、これによつて皇室の御安泰國家の平和、國民の幸福を祈念するものとならしめた。このやうにして、儒教も佛教も、わが國民の偉大なる同化力により、その同じき部分を取入れられ、その異なる部分を取除かれ、日本的なる儒教と佛教とが新たに構成せられ、こゝに特長ある日本思想を成長せしめたのである。而してその思想の根柢となつたものは、祖神崇敬の信仰であつた。これは實に、日本人がいつでも日本人であるところの根本精神である。この根本精神が確立してゐる故に、わが國民の同化力は、頗る強大なるを得たのである。その同化力が極めて健全であつたから、國民は能く外來文化を取入れてこれを消化し、固有の文化を養つて、更に新たな文化を創つて來たのであつた。

隋・唐文化と政治上の革新

聖德太子の政治思想

國家の發展に御留意

神祇崇敬

隋におくられたる國書

十七條憲法

隋・唐文化と政治上の革新　推古天皇のとき、支那と公に國交を開かれてから隋・唐の文化が直接に流れ込み、わが政治の上に大きな影響を與へた。その源は聖德太子に始まる。太子の政治思想は、國家を本位とするものでいらせられた。(1)太子は推古天皇の皇太子でおはしまし、その上攝政であらせられ、常に國家の發展に御心を注がせられた。(2)そして特に天皇に申し上げ、「わが國は常に神祇を崇敬することによつて國土の平安を惠まれてゐるのであるから、群臣皆心を竭して、これを拜せよ」といふ意味の詔を戴き、祖神崇敬の精神を宣揚せられた。(3)この敬神を主とする國家觀念は、外國に對する場合において鮮かに現れ支那の大國隋と始めて國交を開かれるとき、その國書に「日出處ノ天子、致書日沒處ノ天子ニ」と書いて國體の尊嚴を示された。(4)殊に十七條憲法において和の貴きことを示し、天皇の詔を奉じて公事に身命を捧ぐべきことを

大化の改新

大陸文化の活用

大寶律令の特異性

女性の貢獻

教へ、皇室中心の國體の本義に則りて、新しい時代に適應する政治を施さうとなされ、その上、佛教をも取入れて、國家をして世界的博愛の精神を有せしめることに努められた。太子は早く薨去せられたが、それより二十餘年の後に大化の改新が成された。その中心に立たれた中大兄皇子は、大氏族を抑へ、皇權を伸張せられ、孝德天皇の皇太子として新政を翼賛しまゐらせた。この新政は、内よりいへば國體の本義に立てる政治の要求に基き、外よりいへば、隋・唐の大陸文化の刺戟を受けて成されたものであり、能く大陸文化を受け容れて、これをわが國情に適するやうに變化せしめてゐる。尋いで定められた大寶律令において、特に神祇官を設け、これを諸官省の上に置いたことのごときは、實にわが祖神崇敬の國風の現れであつて、唐の制度では全く思ひ及ばざることである。

女性の貢獻　古代において、女子の國家・社會・文藝などに貢獻す

經濟方面

るところは頗る大きかつた。(1)先づ經濟の方面より見れば漁業狩獵・牧畜等は、概ね男子に委ねられたけれど、農業は女子の勞働に依ることが多く、養蠶及び機織・裁縫等は殆どその手を待たねばならなかつた。

信仰方面

(2)次に信仰の方面より見れば、古代の女子は神に奉仕する大切な役目を有してゐた。このやうに經濟上と信仰上とで大きな貢獻を爲すので、部落の生活における女子の地位は自ら高くなり、

政治方面

(3)政治方面にも重んぜられ、その部落の長となるものも少くなかつた。この事實は多くの事によつて傳へられてゐる。農業養蠶の神でおはします豐受大神が女神でいらせられることは申すも畏し、豐鍬入姫命は大和の笠縫邑において、倭姫命は伊勢の五十鈴川のほとりにおいて、いづれも天照大神に奉仕し、それより後、常に皇女がお仕へ申し上げることになり、降つて平安時代に至り、有智子内親王は賀茂大神に奉仕し、それより後、また常に皇女

妻としての婦人

がお仕へ申し上げた。天照大神に奉仕する皇女を齋宮といひ、賀茂大神に奉仕する皇女を齋院といふ。神功皇后は御身を以て三軍を指揮したまひ、應神天皇の御代には、長い間攝政をあそばされた。このやうに古代の婦人は社會上に相當な地位を占めてゐたが、妻としては貞淑を重んじ、日本武尊の御身に代りて走水の海に投ぜられた弟橘媛、雄略天皇の御德を襲けまゐらせた草香幡梭姫皇后、調伊企儺に殉じて新羅の土となつた大葉子、夫を助けて蝦夷を逐ひ退けた上毛野君形名の妻などのやうな立派な事蹟を殘した人が少くない。

婦人と社會事業

佛教が傳へられて後は、その慈悲・忍辱の教を身に體して社會事業に力を盡す婦人が多くなつた。高貴の御方としては、光明皇后が、施藥院・悲田院などを設け、貧民・孤兒などを救ひたまへることは殊に名高いことである。檀林皇后・淳和天皇皇后も篤く佛教を信じたまひ、慈善の御行が多くいらせられた　和氣

婦人と文藝

廣蟲の事蹟も遍く世に知られてゐる。文藝の方面では、殊に勝れた才能を現した人が多く、萬葉集に見える歌人の中には磐姫皇后・倭姫皇后・額田女王・持統天皇を始めたてまつり、大伴坂上郎女のやうな豐富な歌才の持主もあり、無名の婦人にして名歌を殘したものも少くない。

上代婦人の風俗

上代婦人の風俗　上代人の生活は簡素であつた。野趣に滿ちた聚落に、丸木の柱、茅葺の屋根、葛で結び、立薦を垂れた素樸な家は、その頃の婦人の起居するところであつた　彼女等は長い髪を中央から左右に分け、後背の方に垂らしてゐた。日蔭髪で頭の周圍を卷き、後の方で結ぶこともあつた。今の島田髷のやうに結び、竪櫛を挿すこともあつた。耳には耳玉を施し、耳環を懸けることもあつた。顔に化粧をすることなどは餘り無かつたが、赭土でつくつた顔料で眉を描いたことは古書に見えてゐる。衣服は丈の短

上代婦人の服飾

い上衣を著け、その下方に長い裳を纏ふ。上衣は垂頸で左衽に合せ、紐で結び、袖は袵の長い窄袖である。裳は全幅に襞を取つたもので、上衣の上または下に著け、その紐を左脇で結ぶ。その上に帶を締め、正面または少しく左右に寄せて、その兩端を垂れる。衣服の色は大抵單色で、上衣は綠色、裳は淡赤色のことが多い。頸には丸玉・切子玉・曲玉などを連ねた美しい頸玉を懸ける。腕には手玉または釧を捲く。肩から長い領布を懸け、地に曳いてゐる。領布は絁でつくり白色である。足には布の履を穿いた。外出や旅行のときには襲衣といふものを全身に纏うた。このやうな風俗は、朝鮮や支那の風俗が傳はるに從ひ、次第に變化し、奈良時代になると、上流の婦人

上代婦人の服裝

奈良時代婦人の服飾

達は、見違へる程美しい裝ひを凝らすに至つた。彼女等は、髪を二つに結び、その餘りを左右の兩頰に沿うてたるませ、顏に白粉を施し、頰に紅脂をさし、額や口の兩側に紅の點を打つて化粧とした。

上衣は黃色の地に蘇芳や綠などの染料で文樣を染め拔いたもの、裙は白地に褐色や薄紅などで色を重ねて緣どつた文樣のあるものなどが愛用され、美しい文樣の帶を前に結び垂れ、純白の紗の領布を肩に懸けるといふ風であつた。女官の禮服に至つては、一しほ艶麗であつた。これ等は唐の婦人服裝の影響を受けて發達したものである。しかし地方の婦人達は、やはり純朴なる古代の風を存してゐた。

奈良時代貴族婦人の服裝

神事風俗

その他神事に奉仕する場合の風俗は、殊に清淨を旨とし清清しい氣品を備へてをり、殆んど大陸文化の影響を受けないで古代の面影を保ちつゞけた。これは祖神崇敬を重んずる國民性の然らしめるところである。

歌舞風俗

歌舞音曲に興ずるときの風俗は單純にして天眞流露の趣を備へてゐたが、朝鮮や支那などの樂器・樂曲等の傳はるにつれ、奈良時代には著しく變つて來た。

外來文化の醇化

大陸との交通
遣唐使

唐の文化の移植

第四章　外來文化の醇化

外來文化の同化と國風文化の發達　外來文化の同化は、政治・制度の方ばかりでなく、佛教・文學・美術等に就いても、見ることが出來る。よつて次に奈良時代より平安時代に亙り(1)大陸との交通、(2)佛教の日本化、(3)文學の進歩、(4)美術工藝の發達に就いて外來文化が醇化(ジユンクワ)して日本風になつてゆく有樣を述べよう。

大陸との交通　奈良平安時代に亙り、遣唐使がたび〳〵派遣され、唐の宗教・學問・文學・美術等をはじめ、その風俗・習慣・言語・嗜好(シカウ)等もわが國に傳へられた。遣唐使の派遣の最も盛んなのは奈良時代であり、隨つて當時の文化は唐の文化を移し植ゑたやうな觀がある程であつたが、平安時代の中頃、遣唐使は廢せられ、わが國風文化が大いにおこつた。

渡航の困難

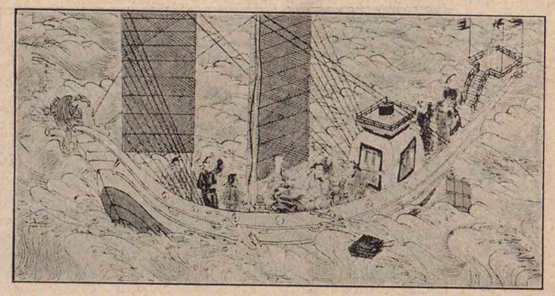
佛教の日本化
奈良時代の佛教

政治と佛教

平安時代の佛教

遣唐使の乘船は、船體が脆弱(ゼイジヤク)なため、往復共風浪の難を蒙ることが多く、無事に歸(カヘ)れぬものも少くなかつた。萬葉集に見える送別や懷鄕(クワイキヤウ)の歌には往往にして悲壯なものがある。

佛教の日本化　奈良時代の佛教は、朝鮮・支那などから傳來したものであり皇室の御保護を受けて、主(オモ)に上流社會に行はれ、その寺院はおほむね都市の內外に建立(コンリフ)されてをつた。そして當時の政治が佛教保護を旨(ムネ)としたため政治と佛教とは極めて密接な關係を有(モ)ち、その弊害が現れては、政治は佛教によつて多くの波瀾を生じ、佛教は政治によつて多くの腐敗を暴露(バクロ)するに至つた。然るにその後を承(ウ)けて平安時代に至り、最澄と空海とが出でて、大

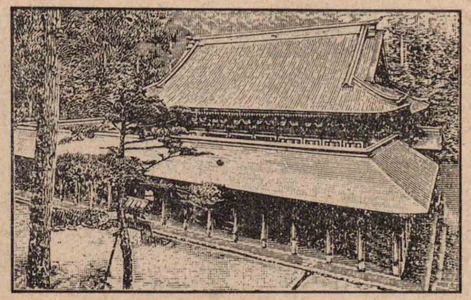


渡唐船

いに佛教を振ひ興した。その傳へた天台宗と眞言宗とは、支那において既に立派に發達した宗派であつたが、わが國に來てから著しく日本化され、敬神の念に富み國體觀念が強く、皇室の御安泰・國家の鎭護を祈ることを旨とした。但、これ等の新宗派は、やはり貴族の間に多く行はれ、未だ國民全體の生活と能く合するに至らなかつた。そしてその寺々は、概ね山岳に凭つて建立せられたので、天台・眞言の僧侶は、自ら政治と關係を絶ち、心靜かに思索に耽ることの出來る境遇に身を置かしめられ、その間から勝れた名僧が多く出た。

神佛習合の思想

神佛習合の思想　わが國固有の敬神の思想と、後に傳へられた崇佛の思想とを融合させようとする努力は、平安時代に至り、ます



比叡山延曆寺根本中堂

本地垂迹說

〳〵盛んになり、神佛習合の思想が大いに發達して來た。これによつて神社と佛寺とが同じ境内に建立されたり、神號と佛號とが一つになつたり、神體を現すのに佛體を以てするやうになり、つひに鎌倉時代に至り、本地垂迹說が大成した。本地垂迹說とは本地たる佛・菩薩が、教化のために迹をわが國に垂れて神といふ名で化現せられるといふ考へ方である。

藥師寺僧形八幡

延曆寺と日吉神社、興福寺と春日神社とは、社寺が同一の境内にある例である。八幡大菩薩は、八幡といふ神號と大菩薩といふ佛號とを一つにした例である。嘗て大和藥師寺境内の八幡宮にあつた僧形八幡は、神像でありながら、佛體を以てこれを現してある。

文學の進步
漢文學

文學の進步　奈良時代には唐の文學の影響を受けて漢文學が大いに開け、吉備眞備を始め、學問が博く、詩文に巧みな人が少くな

三筆

國文學

萬葉集

その作者

その特色

かつた。平安時代になつてからも嵯峨天皇の前後には、小野篁・都良香などの學者が輩出し、多くの詩集が撰ばれた。嵯峨天皇は深く學問を好ませられ、經史に通じ、詩文をよくせられ、殊に書道に達したまひ、僧空海・橘逸勢と共に三筆と稱せさせられる。その皇女有智子内親王も、才學秀でさせたまひ、妙齡にして既に見事な漢詩を詠ぜられた。當時、宮廷に奉仕する人々にして、漢文學の心得のないものはなく、詩文は絶えず行はれてをつた。國文學としては、奈良時代に萬葉集の編纂が行はれた。その作者は、上は天皇・皇子・皇女を始めたてまつり、下は名もない田夫・村娘に至るまでを網羅し、ひとり京畿の地方ばかりでなく、遍く東國より西國に亙つてゐる。その曲調は、素樸にして力強く、その措辭は自由にして雄渾であり、その感情は自然にして詐らず、その思念は敦厚にして敬虔の情に富み、一たびこれを繙けば、古代の日本人が天眞の聲を擧げて

平安時代の作品

伊勢物語

竹取物語

古今和歌集

土佐日記

女流文學の勃興

大天・大地の間に高唱するのを聽く思があり、古代の生活と文化とを切實に傳へて、惻惻として人に迫る力がある。柿本人麻呂・山部赤人・山上憶良・大伴旅人・同家持・額田女王・大伴坂上郎女などは集中の錚々たる歌人である。然るに平安時代の中頃から片假名・平假名が行はれるにつれて、國文學は長足の進歩をなし、伊勢物語が出て和歌を旨とする短篇隨筆樣の形を開き、竹取物語が出て敍述を旨とする組織的說話の道を開き、古今和歌集が出て勅撰歌集の魁となり、土佐日記が出て紀行文體の散文を創めた。作者としては在原業平・紀貫之・凡河内躬恒などが有名である。尋いで藤原氏の攝關政治が隆盛を極めた頃、女流文學が勃興し、不朽の作品が多く出て、國文學史の上に異彩を放つた。日記には藤原道綱の母の蜻蛉日記・和泉式部日記・紫式部日記・菅原孝標の女の更科日記などがあり、隨筆には清少納言の枕草子があり、小說には紫式部の源氏物

語があり、千紫萬紅、色とりどりなる風情がある。

右大將道綱の母

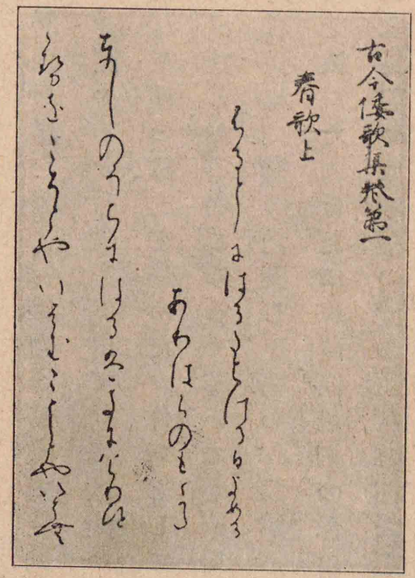
藤原道綱の母は普通右大將道綱の母と呼ばれてゐる。藤原兼家の妻となつて道綱を生んだ。人となり貞淑、殊にその子に對する慈愛が濃やかであつた。蜻蛉日記は、日記とはいひながら凡そ二十一年間に亘る寫實小說風の自敍傳のやうなものである。

和泉式部

和泉式部は、大江雅致の女であり、その日記は和泉式部日記と呼ばれ、二年間程のことを書いた短篇である。

紫式部

紫式部は藤原爲時の女、藤原宣孝の妻である。宣孝の歿した後、貞操を守つて再嫁せず、一條天皇の中宮上東門院彰子に仕へた。その日記は紫式部日記と呼ばれ、中宮御產の前後の事などを主として記したものである。源氏物語は五十四帖より成る大作である。



古今倭歌集卷第一
春歌上
ふるとしにはるたちける日よめる　（在原元方）
としのうちにはるはきにけりひととせをこそとやいはむことしとやいはむ

紀貫之筆蹟

菅原孝標の女

菅原孝標の女は、右大將道綱の母の姪である。更科日記は著者が十三歲のとき、父に伴はれて、その任國上總より京都に歸ることから筆を起し、凡そ四十年近い間の事柄を、晩年になつて後、簡潔に書き記したものである。

清少納言

清少納言は、清原元輔の女で、一條天皇の皇后定子に仕へた。枕草子は紫式部の源氏物語と竝んで國文學の至寶と稱せられ、簡潔で力强い名文である。

女流歌人

和歌に秀でた女流作家としては、曩に小野小町、伊勢などがあつたが、攝關政治の盛んな頃、和泉式部・赤染衞門・伊勢大輔をはじめ、勝れた人々が少くなかつた。

上流婦人の生活

上流婦人の生活

氏族制度の崩壞と家族制度の發達

古代氏族制度の世の中では、家族といふ團結が十分獨立してをらず、婦人は常に氏族全體のために働いてをつた。然るに氏族制度が崩壞し、その中から家族制度が發達して來

個人的發展

情念偏重の傾向

婦人の教養

るのにつれ、婦人はだん〳〵家族生活の重要なる地位を占めるやうになつた。しかし平安時代では、家族制度は、まだ健全に組織されるまでに至らず當時の上流婦人は、社會人として世間に出て働くよりも、また家族人として一家を整理するよりも、寧ろ個人としての才能を自由に發展させたものが多かつた。されば名高い女流作家達の中には國家社會のために貢獻しようと考へるのでもなく、貞淑なる良妻賢母とならうと努めるのでもなく、情念の動くに任せて流れてゆくやうな傾向が著しく見える。そして彼女等は、熱心に自己の教養に心を盡し、和漢の學問を修め、書畫音樂などの

平安時代女官の盛裝

平安時代女官の服飾

これは平安時代女官の服飾であります。左の方の衣桁に掛けてあるのは紅の打袴、萠黄菱文の單、黄地雲立涌文の五衣、中央の衣桁に掛けてあるのは、紅の打衣、鼠がゝつた萠黄梅花の文樣の表著、桐竹鳳凰の摺文の裳、紫地に龜甲文の唐衣、これに內衣を加へれば、十二單が揃ふのであります。前面にある墨塗の臺は冠臺であり、男子の場合ならば、こゝに冠や笏などを置くのであるが、女子の場合故、こゝではその上の段に平額(ほゞ圓形をなし、薄く細長い金屬片を光線形に三本附けたもの)釵子(ピンのやうな形をしてゐる。平額の向つて左方に見える)櫛(平額の正面に見える)紫緒(平額の向つて右方に見える。平額の下邊にある二つの小さい孔に通す)丸鬘が載せてあり、下の段には長い飾紐を垂れた和扇が安置せられ、その向つて右に帳紙が置かれてあります。和扇は所謂檜扇のことであり、普通檜の板三十九枚を重ね、表裏共に胡粉や金銀箔で塗り、その上に華麗な彩畫を描いてあります。尚、畫面の右の方に建てられてあるのは几帳後の方、長押から垂れてゐるのは簾であります。

（載所成大建俗風本日）「御服」の官女代時安平

御服の官女代時安平

次の此の頃は御服の官女代時安平と題して、江戸時代の官女の御服の模様を描いたものであります。

この御服の模様は、三重襲の表面に、十二枚の重ね、裏表共に黄色の金襴に浴びて、十二枚の重ね、裏表共に黄色の金襴に浴びて、十二枚の重ね、裏表共に黄色の金襴に浴びて

婦人の風俗

趣味を養ひ、優雅にして典麗なる美しい生活を展開していつたのであつた。殊にその風俗に至つては、日本趣味の極致を發揮したものであつた。丈なす黒髪を二つに分け、後背に垂れて末を剪り揃へ、顔には白粉を施し、眉には黛を加へ、口脂を塗り、齒黑をなした。禮裝は通常十二單と呼ばれるもので、內衣・紅袴・單・五衣・打衣・表著・唐衣を重ね、裳を纏ひ、檜扇を持ち、懷に帖紙を入れ、髪上具には平額・釵子・櫛などがある。十二單の地質模樣色合などは、身分によつてそれ〴〵定めがあつた。平生は寢殿造の對屋に居り、座右の調度たる几帳・火取・亂箱・唐匣・鏡筥・鏡懸・燈臺・几硯等の類、一として優雅ならざるものがない。わが婦人の服飾美は、こゝに至つて極まるといふも過言ではあるまい。

美術の發達

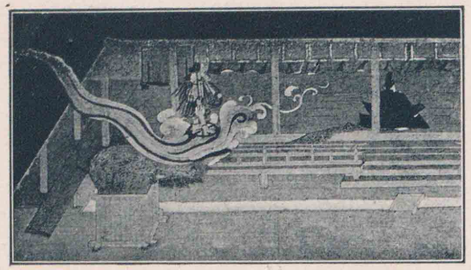
美術の發達　美術史では奈良時代を平平時代といひ、平安時代は更に弘仁時代・藤原時代(前期・後期)といふやうに分けるのが常で

天平時代の藝術

平安時代の藝術

日本趣味的創作

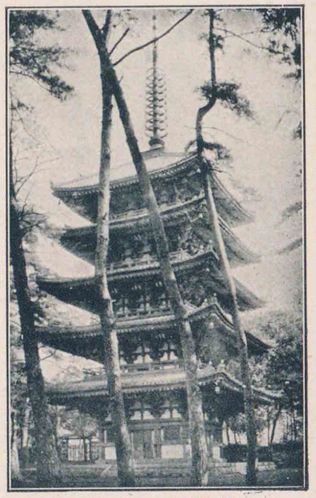
ある。天平時代の藝術は、飛鳥時代に傳へられた支那の南北朝式が既に著しく日本化せられた上に、新たに唐式を加へ、印度・西域の要素をも含み、これ等を大成したものであり、建築・彫刻・繪畫・工藝品等はいづれも驚くべき進歩を遂げ、一として光彩を放たぬものがない。それが平安時代に入つてから、初めは天台宗・眞言宗の影響を受けて變化し、やがて純然たる日本趣味のものを創作して、優美典雅な風を備ふるに至つた。これも亦、わが國民性の根柢をなす同化力が、外來文化を醇化して、つひに自己のものとなした事例の一つである。



志貴山縁起

淨瑠璃寺吉祥天

二十五菩薩來迎圖中勢至菩薩



醍醐寺五重塔

觀心寺如意輪觀世音

平安時代の美術

第五章　武士の勃興

莊園の發生　大化の改新のとき、朝廷は全國の土地・人民を收めて、これを公地・公民となし、班田收授の法を設けて、國民にそれ〴〵口分田を班ち授けることとせられたけれども、この制度は餘り能く行はれず、口分田は次第に變じて世襲の私有地となつた。そのほか功勞あるものに賜はる賜田・功田や、神社・寺院の用途に充てる神田・寺田や、新に開發する墾田なども次第に私有地化していつた。これ等の私有地を總稱して莊園といつた。平安時代の中頃より地方政治が亂れるのに伴ひ、自分の土地を社寺・貴族・豪族などに寄進して租稅を納める負擔を免れるものが多くなり、墾田も一層盛んに行はれ、莊園はます〴〵增加するばかりであつた。そして莊園は不輸不入といつて租稅を納めることを免除され、また國司か

莊園の發生

口分田の私有化

その他の土地の私有化

莊園

莊園の利益

國司の豪族

武家階級の勃興

平安時代後期の社會情勢

武士の發生

ら直接の支配を受けないことが多かつたから、莊園を有することは、經濟上にも、政治上にも、大きな利益であつた。それ故地方官たる國司は、在職中、多くの莊園を營み、任期が滿ちても、そのまゝ土著して、つひに地方の豪族となるものが少くなかつた。これ等の莊園には領主と莊官と莊民とがあつた。

武家階級の勃興　莊園の領主には、皇室・社寺・貴族、及び地方の豪族などがあつた。殊に地方の豪族は莊園を直接に經營することが多く、その勢力は最も根强いものであつた。然るに平安時代後期に至り、世の中が次第に不穩となり、山賊・海賊などが横行しても、これを取締る道がなくなるに隨ひ、彼等は多くの私兵を養ひて自ら衞らざるべからず、また國司等の誅求に堪へかねた人民は、豪族の保護の下に集まり、莊民となつてこれに臣事し、こゝに譜代主從の結合が起つた。武士は概ねこの間から發生したものである。

武門の起り

武家の成立

これ等の武士を統率して有力な社會的勢力たらしめたのは、中央より下れる門閥の高い貴族であつた。桓武天皇以後、皇子・皇孫等にして、姓を賜はつて臣籍に下るものが多くなり、在原氏・平氏・源氏等の一族は、いづれも繁衍したけれども、藤原氏全盛の世においては、その力を伸ばすことが出來ず、また古來の舊族のものや、藤原氏一門中のものでも、中央において志を得なければ、しば〳〵地方に下るに至つた。これ等の人々は、その血統・門地によつて地方の豪族に推戴せられ、これを糾合して武士の統率者となつた。これを武門といふ。かくして下から上れる武士の勢力と、上から下れる武門の勢力とが合體してこゝに武家階級が成立つに至つた。武門の中で殊に有力なのは、桓武平氏と清和源氏とであつた。奥州の藤原氏も一時盛んであつた。橘氏からは後に楠木氏のやうな名家が出た。

武家政治の成立
地方の爭亂
源氏と東國
平氏と西國
平氏時代
源氏と武家政治
鎌倉幕府の政治
一一八五年
守護・地頭の設置

武家政治の成立　武家階級は初めは、地方にありてしば〳〵爭亂を起した。平將門の亂・藤原純友の亂・平忠常の亂・前九年の役・後三年の役などはその事例である。これ等の爭亂を鎮定するのに功のあつたのは、平氏・源氏・藤原氏などであり、殊に源氏は東國に勢力を植えつけ、平氏は西國に勢を得て、相竝んで進んで來た。この間に藤原氏の攝關政治は衰へ、院政にも多くの弊害を生じたが、保元・平治の亂の後、武士は著しく政界に進み出で、自分の權力を打ち立てるのにつとめた。平清盛は、その初めに出て勢力を振ひ、凡そ二十年間に亙る平氏時代を現出せしめたが、やがて諸國より起れる源氏のために西海に沒落した。源頼朝は平氏を滅ぼした後、朝廷の許しを得て、文治元年(1185)、公領・私領の別なく、鎌倉の御家人を全國に配置して守護・地頭となし、ゐながら天下の政權を握つた。守護は主として軍事と警察とのことを掌り、地頭は主として土地を管

國史における一大變革
一一九二年
承久の變
剛健果敢の氣風
武家の女性
家を尊重する思想
家族制度の發達

理し、租稅を取立てることを掌つた。これ實に國史における一大變革である。尋いで後鳥羽天皇の建久三年(1192)、頼朝は征夷大將軍に任ぜられて、鎌倉に幕府を開き、七百年に近き武家政治の基を開いた。源氏は僅に三代で亡びたけれども、鎌倉幕府は尙ほ續き執權北條氏はその實權を握つてゐたところ、朝廷は武家政治を倒して政權を回復しようと思召され、發して承久の變となつたが、その事はつひに成らなかつた。承久の變における北條氏の大逆は天人共に容さゞるところである。しかし北條泰時・同時頼のごとく、質素・儉約を守り、民政に心を用ひたものもあつた。當時、武家は一般に剛健果敢の氣風を具へてゐた。

武家の女性　武家時代の社會組織は封建制度を基としたものである。封建制度では家々が土地を世襲するのであるから、家が最も重んぜられ、家系・家格が尊ばれた。それ故、家族制度が次第に

貞操觀念
犧牲的精神
質樸剛健

武家婦人の修養

健全となり、婦人はその内部において重要な役割を負ふやうになり、良妻賢母としての修養を積んだ。かくして(1)貞操觀念が強く、(2)犧牲的精神に富み、(3)質樸剛健なる武家婦人が多く現れるに至つた。彼女達は自ら表面に立つて社會事業に奔走しようとしなかつた。また自分の有する個人的才能を自由に發揮しようともしなかつた。それよりも先に最も善き家庭婦人とならうと志した。彼女達は學問を修め、武藝を學び、困苦缺乏に堪へて成長し、嫁しては夫に仕へて家事を整へ、家人を指揮し、夫をして内顧の憂なからしめ、子女を教養して堅實なる後繼者に仕立て上げることを

鎌倉時代婦人の外出姿

毅然たる行動

以て、己の任務となした。されば女性としての豐かな情操を内に湛へてをりながら、しば〳〵明鏡のごとき明らかなる理智と、鐵石のごとき強き意志とを以て、夫のため、主家のため、君國のために、毅然たる行動を取ることがあつた。建武中興・吉野時代には、殊に多くの貞烈なる女性が出て、永く芳しき遺烈を傳へてゐる。

建武中興の理想
天皇親政
建武中興と學問
佛教

第六章　建武中興

建武中興の理想　建武中興は後醍醐天皇によつて成された大業である。その大業は、天皇親政の大理想の下に行はれたものであつた。わが國は神武天皇御創業の初めから天皇親政であり、天皇が御みづから統治の大權を總攬してをられたところ、平安時代の中頃から攝政關白の政治が起り、ついで院政が起り、更に幕府が出來て武家政治が起つたのは、いづれも正しい道でない。故に、これ等を廢して、天皇親政を實現せられたのが卽ち建武中興であり、これによつて皇室中心の國體の本義が明かに宣揚せられた。

建武中興と學問　建武中興の大理想を養ひ育んだ學問には、佛教と儒教と神道とがある。(1)佛教の中、天台宗や眞言宗のやうに國家の鎭護を旨とするものや、法華宗のやうに國家意識の明かな

儒教
尊王賤覇
尊王攘夷
神道
神宮崇拜
神國思想
後醍醐天皇の御修養

ものや、禪宗のやうに強い國家精神を高調するものは、いづれも能く局面を打開する力を與へたのであつた。(2)儒教では鎌倉時代に朱子學が傳へられた。朱子學は宋の朱熹元晦によつて大成せられた學問であつて、內にしては尊王賤覇、外にしては尊王攘夷の念を鼓吹し、大義名分を明かならしめる力があつた。(3)神道はわが國固有の大道であり、天照大神の崇敬を中心とし、國體の本義に立つものである。武家時代に入りてより國民一般の間に神宮崇拜の念が非常に高まり、わが國を以て神國となす思想が遍く行はれるやうになつた。この自覺はまた皇室尊崇の念を養ふに餘りがあつた。而して後醍醐天皇は、佛教では親しく眞言宗を學ばれ、禪宗の修養を重ねたまひ、また天台宗の奧義に達せられ、儒教では夙に朱子學に依る御進講を聽しめされ、神道では、固より現人神として祭祀を重んじたまはれた。されば天皇の大業を翼賛しまゐら

勤王諸臣の修養

一三二四年

一三三一年

公家

社家

寺家

せて、身心を捧げ盡した勤王の公家・社家・寺家・武家の人々も、悉くその御心を以て心となし、いづれも正しき學問を修めて、日本臣民たる道を踏んだのであつた。

勤王諸臣の修養　正中元年・元弘元年の變に方り、勤王の魁となつた藤原俊基・同資朝は、いづれも玄慧に就いて朱子學を學んだ人であつた。元弘元年、天皇の御身に代りて比叡山に登つた藤原師賢も、朱子學を修めた人であつた。

後醍醐天皇

後醍醐天皇・後村上天皇に歴仕して、吉野朝廷柱石の名臣と謳はれる北畠親房は、神儒佛の三教に通じた人であつた。神宮をはじめ諸國の神官には勤王の士が多かつた。比叡山・高野山等にも勤王

武家

中興政治の瓦解

中興政治の特質

紛雜なる世情

の僧侶が多かつた。楠木正成・新田義貞・名和長年・菊池武時等、燃えるやうな尊王心を以て戰線に立つた武將は、いづれも敬神の念に富み儒佛を尊んでゐた。殊に楠木正成のごときは、純忠至誠鬼神をも感動せしめるものがある。わが臣道の精華は眞に楠公に至つて極まれりと謂ふべきである。

中興政治の瓦解　建武中興の理想は、天日のごとく、永く青史を照らしてゐるが、中興の政治は遺憾ながら、久しからずして瓦解するに至つた。それは公武の融和が缺けてゐたからであつた。そして政務は澁滯して進まず、賞罰は公平を缺き、朝令夕に改まり、紛然雜然たる世情を呈するやうになつた。これが武家政治の再興を期する足利尊氏の乘ずるところとなり、護良親王は、尊氏を除かうとして斃れたまひ、楠木正成・新田義貞も尊氏を倒さうとして、また戰場の露と消え、中興政治は瓦解するに至つたのである。

吉野時代
一三三六年
一三九二年

努力血涙の記錄

吉野時代　延元元年(1936)、後醍醐天皇が吉野に遷幸あらせられてより、後村上天皇・長慶天皇を經て、元中九年(2035)、後龜山天皇が京都に還幸あらせられるまで前後五十七年の間を吉野時代といふ。その歴史は中興の理想を回顧しつゝ、その大業を回復しようとする努力と奮闘と血涙と熱情との記錄であつて、人をして感奮興起せしめる事蹟が極めて多い。後醍醐天皇は吉野の行宮において崩御あらせられるとき、「玉骨は縱令南山の苔に埋るとも、魂魄は常に北闕の天を望まんと思ふ。若し命を背き義を輕んぜば、君も繼體の君にあらず、臣も忠烈の臣にあらじ」と仰せ残された。後村上天皇は、

鳥のねに驚かされて曉の寢覺しづかに世を思ふかな

とお詠みになられた。長慶天皇は、

治まらぬ世の人事の繁ければ櫻かざして暮らす日もなし

とお詠みなされた。憂世愛民の聖慮の程畏き極みである。されば御歴代に仕へ奉れる諸臣も、北畠親房が、「身の憂さはさもあらばあれ治まれる世を見るまでの命ともがな」と詠ぜる心を以て心となし、楠木正行も、新田義興も、菊池武光も、結城宗廣も、刀折れ矢盡き一門を擧げて肝腦地に塗るゝまで、皇運を扶翼したてまつるために戰つたのであつた。

皇族の御苦心

護良親王

尊良親王

恒良親王

皇族の御苦心　建武中興・吉野時代を通じて、殊に感激に堪へないのは、後醍醐天皇の諸皇子が、金枝玉葉の貴き御身を以て、親しく軍事に身心を勞したまへることである。護良親王は比叡山の僧兵を手懷けられ、後、吉野に據つて令旨を發せられ、諸國勤王の義軍を召されて、回天の大業を翼賛しまゐらせた。尊良親王は北條高時のために土佐に流されたまひ、後、足利尊氏の叛するに及び、皇太子恒良親王を輔けて越前金崎城に下り、つひに悲壯な御最期を遂げさせられた、恒良親王は御年もゆかないのに、越前に在つて北

義良親王

宗良親王

懷良親王

貞烈なる女性

國の官軍に號令あらせられ、つひに尊氏のために御痛はしき御最期を遂げさせられた。　義良親王は陸奥にお下りになり、北畠氏を指揮して軍旅にいそしまれた。　親王は後、御卽位あらせられた。これを後村上天皇と申し上げる。　宗良親王は遠江・信濃・甲斐等の諸國を經略して威を振はれ、關東に進出しては、新田氏の軍を指揮して鎌倉を攻略せられたことがある。　親王は勝れた歌人でおはしまし、その「君のため世のため何か惜しからむ捨てて甲斐ある命なりせば」といふ御歌は、千載の下、懦夫をして起たしめる概がある。　また懷良親王は、征西將軍として九州に下りたまひ、菊池氏等の官軍を指揮して奮鬪あらせられた。

貞烈なる女性　建武中興・吉野時代において、多くの忠臣義士が輩出し、君のため國のために身命を捨てて戰つた背後には、常に貞烈なる女性の姿が見られる。　彼女等は正しき學問と修養とによ

楠公夫人

りて大義名分を辨へ、君國のためにすべてを捧げて奉仕すべき固き信念を有し、これに依りて夫を助け、子女を教養し、臣道の精華を發揮せしめた。　しかし彼女等は、常に家を以て自分の據所となし、進んで社會の表面に立たうとはしなかつた。　楠公夫人はその典型的な婦人であつた。　夫人は楠公の最も良き理解者であつた。夫人は楠公の精神を以て自己の精神となし、公をして後顧の憂を懷かず、十分に外で活躍することを得しめた。　公が湊川で戰死された後、十一歲の正行の自害をとゞめて、泣く泣く教訓せられた言葉は、理あり、情あり、血あり、涙あり、殆んど人界を絕せる聲であつた。それは聰明なる理智と、溫和なる情操と、鞏固なる意志との最も能く調和せる立派な性格の裡から出る天來の聲であつた。　正行・正時・正儀の三人の愛子は、母の教育の下に成人して、それ〴〵父の志を繼ぎ、忠臣孝子として讃へられてゐる。　夫人は楠公の生前にお

瓜生保の母

辨内侍

いても、その死後においても、楠木氏の一門族黨を統率してその結合を保たしめながら、自ら表面に立つことなく、終始一貫、家に沒入し、その家を擧げて君に沒入せしめたのであつて、わが國における良妻賢母の最大の典型を示したのであつた。その他瓜生保の母、辨内侍等の烈女が少くない。

瓜生保は越前杣山城に居て、金崎城の官軍を後援したが、その戰況が利を失つたとき、保の母は一族を勵まし、頽勢を挽回して奮戰せしめた、

辨内侍は後村上天皇に仕へてゐた宮女である。天皇は内侍を楠木正行に賜はつたところ、正行は討死を覺悟してゐたので、これを辭しまゐらせた。しかし内侍は貞烈の志を以て、正行の死後尼となり、一生を終つた。

建武中興・吉野時代の回顧

甚大なる道徳的影響

建武中興・吉野時代の回顧

建武中興・吉野時代の歷史は、國體の本義に基き、天皇親政の理想を實現せんがために奮鬪した記錄であり、その後世に及ぼす道德的影響は、甚大なるものである。御歷代の御宸慮は申すも畏し、皇族の御方々の御苦心も更なり、多くの忠臣義士が、身を捨て、家を忘れ、すべてを君に捧げたてまつりて臣民たる本分を全うした事蹟は、恰も張りつめたる鋼鐵の線を彈奏するやうな力强さを以て、人心を感發せしめるのである。されば近世に至り、學問の進歩するに隨ひ、當時の歷史を回顧するものは、異常な感激を以て、或は楠木正成父子の純忠至孝を慕ひ、或は新田義貞一門の忠勇義烈を思ひ、菊池・名和・結城・北畠諸氏の高風を仰いで、或は遺蹟を彰し、或は事實を明かにし、詩に詠じ、畫に描き、つひにはその志を承けついで、中興政治の理想を實現しようと企てるやうになつた。明治維新の大業の成されるに至つた思想的原因を討ねれば、その中には實に建武中興・吉野時代の歷史の影響を多分に見出すのである。

回顧と感激

明治維新の思想的原因

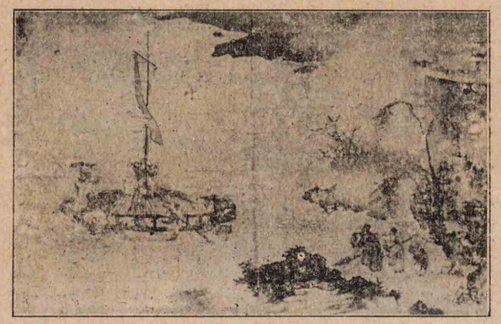
宋・元・明文化の影響

儒教
佛教

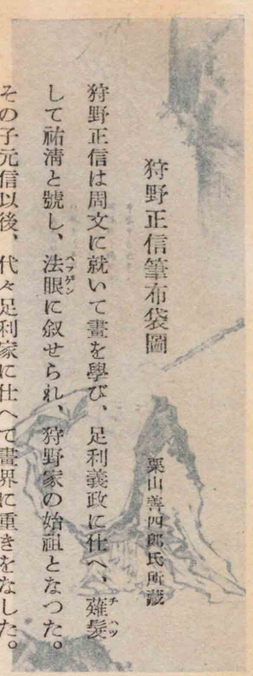
文學

第七章　東山時代の文化

宋・元・明文化の影響　建武中興の大業が破れ、悲壯なる吉野時代が過ぎて後、武家政治が復び行はれ、室町時代が來つた。これより先、平安時代の中頃、遣唐使が廢せられて後も、支那との交通は尙ほ民間において行はれ、宋・元・明の間を通じて、大陸文化は絕えず輸入せられ、わが文化の發達に常に刺戟を與へた。その影響は、鎌倉時代より室町時代に互つて著しく現れ、儒教では朱子學が傳はり、佛教では禪宗が齎らされた。また文學藝術も傳へられ、室町時代の頃、禪僧は、しば〳〵幕府の外交に與り、また遣明使に



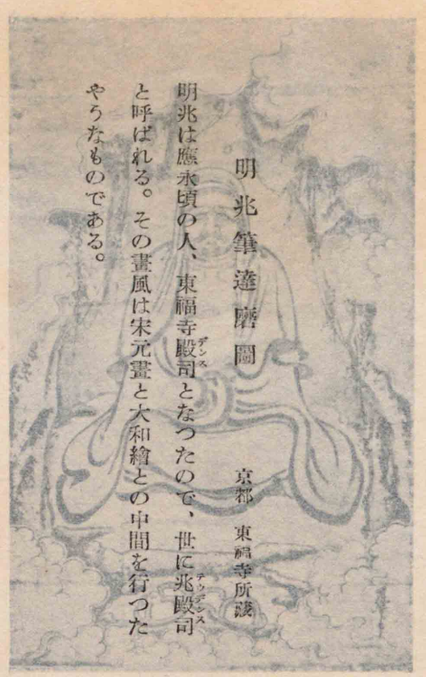
遣明使の乘船



狩野正信筆布袋圖

栗山善四郎氏所藏

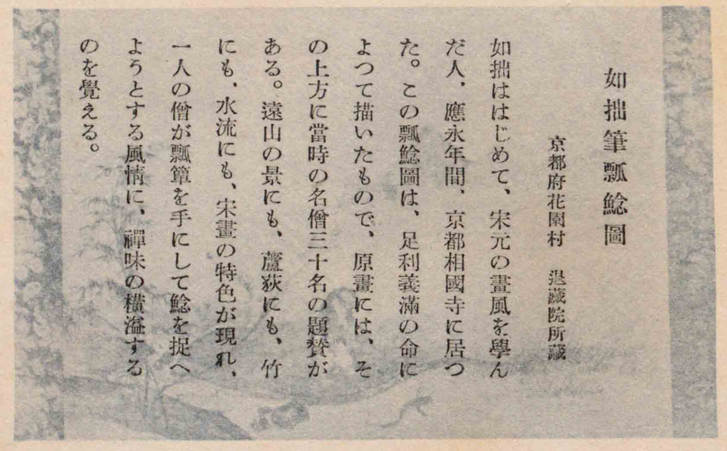
狩野正信は周文に就いて畫を學び、足利義政に仕へ、薙髮して祐清と號し、法眼に叙せられ、狩野家の始祖となつた。その子元信以後、代々足利家に仕へて畫界に重きをなした。



明兆筆達磨圖

京都　東福寺所藏

明兆は應永頃の人、東福寺殿司となつたので、世に兆殿司と呼ばれる。その畫風は宋元畫と大和繪との中間を行つたやうなものである。



如拙筆瓢鯰圖

京都府花園村　退藏院所藏

如拙ははじめて、宋元の畫風を學んだ人。應永年間、京都相國寺に居つた。この瓢鯰圖は、足利義滿の命によつて描いたもので、原畫には、その上方に當時の名僧三十名の題賛がある。遠山の景にも、蘆荻にも、竹にも、水流にも、宋畫の特色が現れ、一人の僧が瓢箪を手にして鯰を捉へようとする風情に、禪味の横溢するのを覺える。

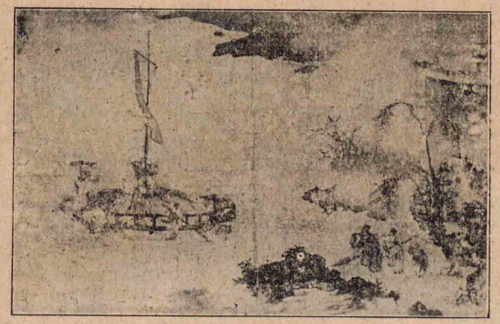
第七章　東山時代の文化

宋・元・明文化の影響

儒教
佛教

文學

宋・元・明文化の影響　建武中興の大業が破れ、悲壯なる吉野時代が過ぎて後、武家政治が復び行はれ、室町時代が來つた。これより先、平安時代の中頃、遣唐使が廢せられて後も、支那との交通は尙ほ民間において行はれ、宋元・明の間を通じて、大陸文化は絕えず輸入せられ、わが文化の發達に常に刺戟を與へた。その影響は、鎌倉時代より室町時代に亙つて著しく現れ、儒教では朱子學が傳はり、佛教では禪宗が齎らされた。また文學藝術も傳へられ、室町時代の頃、禪僧は、しば〳〵幕府の外交に與り、また遣明使に



遣明使の乘船

狩野正信筆布袋圖　栗山善四郎氏所藏

狩野正信は周文に就いて畫を學び、足利義政に仕へ、薙髮して祐清と號し、法眼に叙せられ、狩野家の始祖となつた。その子元信以後、代々足利家に仕へて畫界に重きをなした。

明兆筆達磨圖　京都　東福寺所藏

明兆は應永頃の人、東福寺殿司となつたので、世に兆殿司と呼ばれる。その畫風は宋元畫と大和繪との中間を行つたやうなものである。

如拙筆瓢鯰圖　京都府花園村　退藏院所藏

如拙ははじめて、宋元の畫風を學んだ人、應永年間、京都相國寺に居つた。この瓢鯰圖は、足利義滿の命によつて描いたもので、原畫には、その上方に當時の名僧三十名の題贊がある。遠山の景にも、蘆荻にも、竹にも、水流にも、宋畫の特色が現れ、一人の僧が瓢簞を手にして鯰を捉へようとする風情に、禪味の橫溢するのを覺える。

ある。

この作品は、中国の宋代の画風を大変よく伝えている。その画風は、宋代の画家の中でも、特に李唐の作風に近い。

聞北羅漢圖

京都　東福寺蔵

この作品は、東福寺開山の聞北羅漢を描いたものである。聞北は、宋代の僧侶で、禅宗の修行者として、厳しい修行を積んだ人物である。この作品は、聞北が羅漢の姿で、岩の上に坐している姿を描いている。

東山時代の繪畫

東山時代頃の畫家
明兆
如拙
周文
雪舟
狩野正信
土佐光信
狩野元信

禪宗趣味の普及
建築
金閣・銀閣

充てられて渡海し、彼土の文藝を修めるものが多かつた。

東山時代の繪畫　將軍足利義政の頃、前後數十年に亙る間は、特に東山時代といはれ、美術に異彩を放つた時代であつた。元來、宋は美術の盛んな國であり、繪畫には多くの名人が出た。それ等の畫風は元・明を經て、いづれもわが國に傳はり、東山時代の前後に亙つて、また多くの名家を輩出せしめた。中にも人物畫を善くする明兆、山水畫に巧みな如拙・周文及びこの畫風を大成せる雪舟のごときは、その錚々たるものである。狩野正信は畫を以て將軍義政に仕へた。土佐光信は大和繪を中興した。正信の子元信は和漢の粹を拔いて別に新生面を開いた。

禪宗趣味の普及　禪宗は、學問や、文學や、繪畫のほか、建築にも影響し、茶道・花道・香道などをも發達せしめた。先づ建築では、禪宗樣が次第に行はれ、金閣・銀閣のごとき美術建築を成すに至つた。金

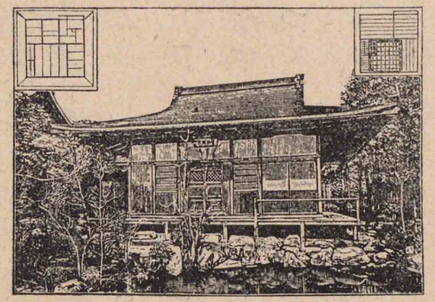
書院造

金閣

銀閣

東求堂

閣は平安時代の寢殿造に禪宗の寺院風を折衷せしめた樓閣であり、銀閣は更にこれに禪僧の學問所たる書院造の樣式を加味せしめた樓閣である。書院造は、この後一般住宅の樣式となつたもので、入口に玄關を設け、室内に疊を敷詰め、襖・明障子を以て間毎を仕切り、上段に床の間・違棚を設け、床には畫幅を懸け、その前には枝振の面白き挿花を活け、名香を薫ずる香爐を置き、極めて雅致の豐かな構造のものである。



慈照寺東求堂

右上方天井の組方　左上方各室疊の敷方

金閣は足利義滿の山莊内に建てられたものである。この山莊は後に寺とせられ、鹿苑寺と呼ばれた。銀閣も亦足利義政の山莊内に建てられたものである。この山莊も後、寺とせられ、慈照寺と呼ばれた。

銀閣の傍に東求堂があり、その内部は四間に分

茶道の發達

花道の發達

香道の發達

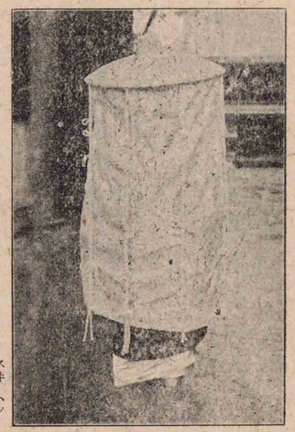
婦人の風俗服飾

れてゐる。その中の四疊半の間は、中央に爐を切つた小書院で、後方には六尺の書院構と、三尺の違棚とがある。これが四疊半茶室の起源といはれてゐる。

茶は平安時代の初め、既にわが國に傳はつたが、鎌倉時代に至り、漸く世間に愛好せられ、東山時代から一層盛んになつた。時の將軍義政は茶の湯に通じ、花道・香道を解し、園藝を愛し、書畫を好み、猿樂を賞し、自ら藝術の發達に貢獻した。草木の花を愛賞する趣は昔からあつたが、室町時代になると、京都六角堂の執行池坊は、花道の宗家となつた。香木は奈良時代にも傳來されてをり、平安時代には薫物合の遊戯が行はれたり、香を焚いて清香を賞する風が次第に普及し、室町時代には種々の法式が整ひ、多くの流派を生ずるに至つた。

婦人の風俗　上流婦人の晴の裝は、やはり十二單であつたけれど、大抵は省略して用ひられた。殊に唐衣と裳とを著けず、袴を著

けたばかりの略裝が行はれ、つひには袴の代りに湯巻が用ひられて正服用の服飾となつた。湯巻はもと下級の女官の使用したもので、白絹でつくられてゐたが、正裝用となるにつれて華麗なる色彩を用ひ、下つて桃山時代に至つては、絢爛目を奪ふばかりに美しきものとなつた　小袖ももとは下著であつたが、やがて公服として用ひられるやうになつた。また外出のときは、袿を著け、切袴を穿き、表著をかけ、市女笠を被り、若し市女笠を用ひないならば、頭の上に表著を被つて出るのであつた。髪は公武貴賤共に垂髪を尚び、頬の兩脇の髪だけを、凡そ二寸程に剪り、これを鬢批といつた。中流以下の婦人は垂髪であるが、成るべく短く剪り揃へて、元結にて束ね、後に垂らすやうになり、或



室町時代婦人の外出姿

婦人の修養

は髪を頭上で束ねたり、布で頭を巻包むものもあつた。上流婦人は和歌や書畫や音曲などを學び、茶の湯や活花や聞香などを習つた。東山時代は鎌倉時代からの武家文化が漸く變つて、近世的な文化の流れ出る時であつたので、この頃の婦人の趣味は、後世の婦人の往く道を開いたのであつた。

東山時代の文化の後世に及ぼせる影響

儒教

佛教

文學

東山時代の文化の後世に及ぼせる影響　東山時代の文化は、禪宗趣味を基調となし、淡泊幽玄の趣を備へ、格調の高いものであり、後世の文化に大いなる影響を及ぼした。(1)儒教では當時禪僧によつて養はれてゐた朱子學は、安土・桃山時代より江戸時代に入つて大いに行はれつひに一大學派となつた。(2)佛教では禪宗が大いに重んぜられた外、淨土眞宗が盛んになり、法華宗も次第に弘まり、共に今も遍く行はれてゐる。(3)文學では禪僧の詩文は、近世の漢文學の先驅をなし、當時勃興した連歌は、近世の俳諧の道を拓き、

繪畫

建築

茶の湯・活花・香道

現代文化と東山時代文化

謠曲・狂言は近世に入つてます〳〵普及し今日においても、廣く愛好せられてゐる。(4)繪畫では雪舟によつて代表せられる水墨畫をはじめ、狩野元信において大成せる狩野派及び土佐光信によつて新生面を開ける土佐派はいづれも近世に入りて畫界に重きをなし、延いて現代に及んでゐる。(5)建築では書院造は、次第に一般民衆の住宅に取入れられるやうになつた。(6)茶の湯・活花・香道に至つては遍く上下に行はれ、現代においても、必要なる修養として重んぜられ、國民の間に高尚なる趣味を涵養してゐる。このやうにして現代の文化は、遙かに東山時代の文化にその淵源を求め得られるものが少くないのである。

中世より近世への移行

政治上の統一

社會分裂の大勢

地方的小統一

織田信長・豐臣秀吉の統一

第八章　社會の革新

中世より近世への移行　室町時代の末期なる戰國時代より安土・桃山時代を過ぎて江戸時代の初期に至る間は、世間の移り變りの激しい時期であり、各方面に革新が行はれ、中世的な色彩が褪せ、すべてが近世的な裝ひを凝らして面目を新たにした。

政治上の統一　室町幕府は初めから權力が弱く、應仁・文明の大亂を經て、社會は次第に分裂し、戰國時代となつた。然るに分裂の極、地方的に小なる統一が行はれはじめ、つひに強は弱を兼ね、大は小を併せ、潑剌たる世相を呈した。北條氏康・武田信玄・上杉謙信・今川義元・德川家康・織田信長・毛利元就・長曾我部元親・大友義鎮などは、この線上に活躍せる英雄であつた。その間において織田信長が先づ中央に大旆を押し立て、三十餘國を平定したけれど、中道にし

徳川家康の統制政治

て斃れ、その將豐臣秀吉がこれを承け繼いで、つひに全國の統一を完成した。その上、秀吉は國民の發展的氣風に乘じて海外に勢力を伸ばし國威を發揚した。徳川家康は、その後を承け、内においては、幕府政治を開き、すべての國民生活に統制を加へ、外においては平和的外交の方針を取り、商業貿易を保護奬勵した。その後、幕府は、主として天主教の問題に累はされて、鎖國を斷行し、專ら内治に力を用ひ、つひに近世の泰平に達したのである。即ちこの期間において、政治は分裂より統一に邁進したのであつた。

分裂より統一へ

社會機構の變化

社會機構の變化　平安時代の中頃以來、經濟生活の基礎となつてゐた莊園制は、室町時代の中頃より著しく崩壞しはじめ、信長・秀吉・家康の檢地を經て、昔の面影は無くなり、新たなる土地知行の仕組が發達した。これに伴つて農村の組立方が變化し、農業を經營する方法も進歩し、農民の地位も亦變り、兵農が分離し、農民はたゞ

莊園制の崩壞

農民の地位の變化

商工業者の地位の進歩

土地を耕作し、年貢を納めるだけのものとなつた。これに對し、商工業者は、鎌倉時代から次第に勃興し、近世に入りては町人と呼ばれて社會上に地歩を占めるに至つた。かくして武家を主とし、町人・農民等の階級が定まり、それ〴〵の身分制度が確立し、社會機構は、全く近世的特色を有するやうになつた。

思想上の變化

最も健全なる思想

思想上の變化　國民思想もまた變化を生じ、皇室尊崇の思想が著しく發達した。皇室尊崇の思想は、古よりわが國民の有する最も健全なる思想である。建武中興・吉野時代において、天皇親政の理想を翼賛したてまつり、一身一家を捨てて奮鬪せる多くの忠臣義士は、皆この健全なる思想の上に立つてゐたのであるが、室町時代において足利氏が政權を握るに及び、忠臣と逆賊とその處を異にし、名分が地を拂つて空しき觀があつた。然るに戰國時代には敬神尊王の思想が大いに興り、諸社・諸寺をはじめ、諸國の英雄は心

六角高頼
本願寺光兼
大内義隆
北條氏綱
今川氏輝
朝倉敎景
毛利元就
織田信秀・同信長の敬神尊王

を傾けて皇室に奉仕し、織田信長・豐臣秀吉のごときは、その一生を通じて、偏に皇室尊崇の至らざることを恐れる有樣であつた。隨つて當時臣民としての至情をさゝげた美談が少くない。

後土御門天皇御大葬のとき、近江の六角高頼は、その御料を獻上した。後柏原天皇は御踐祚の後、二十二年を經て、御卽位禮を擧げさせられたが、そのとき本願寺光兼が獻金した。後奈良天皇は御踐祚の後、十年を經て御卽位禮を擧げさせられたとき、周防の大内義隆をはじめ、相模の北條氏綱・駿河の今川氏輝・越前の朝倉敎景等は、それ〴〵獻金してこれを翼賛しまゐらせた。正親町天皇は御踐祚の後、三年にして御卽位禮を擧げられたが、そのとき毛利元就が獻金した。これ等は皆皇室を中心として仰ぎたてまつることによつて、泰平を期する至誠より出たことであり、群雄はいづれも上京して天皇を戴き、勅命を奉じて統一の大業を成し、以て宸襟を安んじたてまつることを庶幾つてゐたのである。

尾張の織田信秀は敬神尊王の念に富み、御料を獻じて皇居の築地を修理し、また豐受大神宮にも遇營料を奉つた。その子信長もまた敬神尊王の心極めて厚く、しばしば獻金して忠誠の情を致し、永祿十年、正親町天皇より禁裏御料所回復の勅命を

豐臣秀吉の尊王
聚落第行幸
風俗の變遷
一般風俗の特色
上流婦人の服飾

拜受したときは感激指く能はず、翌年、上洛して京都附近を平定するや、御料所をたてまつり、皇居を修造しまゐらせ、それより絶えず金錢・物品等を獻上し、また久しく廢れてゐた伊勢神宮の正遷宮式をも復舊しまゐらせた。

後陽成天皇の御時には、世の中が漸く治まつて、戰國時代の風塵は靜かになり、桃山時代の國威伸張の春を迎へさせられたのであつたが、天皇は豐臣秀吉を深く御信賴あそばされ、秀吉はまた誠意を傾けて奉仕しまゐらせ、君臣の間、和氣靄々たるものがあつた。天正十六年、聚樂第行幸のごときは、その美しい現れである。

風俗の變遷

戰國時代から安土・桃山時代を經て江戸時代初期に至るまでの風俗は、おしなべて清新・濶達・雄健・豪華の趣を備へてゐた。その趣は安土城・大阪城・聚落第・伏見城のごとき大建築に現れ、金碧燦爛として人目を眩ずる繪畫・彫刻に現れ、華麗なる武具・蒔繪・染織等の工藝品に現れたが、風俗の方では華麗なる服飾・調度に現れ、奔放なる歌舞音曲に現れ、さながら春の新潮の高鳴るがごとき活氣に滿てる世の中たらしめた。當時の上流婦人には、新たに

民衆婦人の風俗

勃興せる武家婦人が多く、その服飾も東山時代の風を承けて、清新の趣を加へ、袖口の小さい小袖を重ね、目も絢なる打掛を著け、或は華麗なる湯卷を纏ひ、外出のときには被衣をいたゞくのであつた。

桃山時代の風俗

桃山時代の婦人

黛は概ね額の上の方に施してゐる。この時代は、民衆の力が自由に伸びた時であり、一般の婦人も世間に現れて活躍し、歌舞音曲が遍く愛好せられ、淨瑠璃・操り・女歌舞伎などが行はれはじめた。

桃山時代の上流婦人

こゝに掲げた淺井長政の妹であります。長政夫人お市と細川昭元夫人お玉とは、共に織田信長の妹であります。昭元夫人は白地に金と朱と紫との色の桐の模様のある綸子の小袖を幾枚も重ね、目覺むるばかりに美しい湯卷を纏ひ、白の袖口の小さい小袖をあしらつた衣裳を著けてをります。

子供の時代は、この頃の特徴であり、袖口の小さい小袖は昔のものに比べれば、すつと上の方に描かれてをります。

人夫政長井淺

人婦流上の代時山桃　　人夫元昭川細

三田元夫人(樣)は、

夫人(樣)は、目鼻立ちの

美しい方で、眼元に

愛嬌のある方でした。

夫人は、目鼻立ちは

美しい方で、眼元に

愛嬌のある方でした。

夫人は、白粉を余り

使はず、白い

肌に、薄く紅を

差して、

眼元に愛嬌のある

近世の文教

幕府の學校
徳川家康の好學

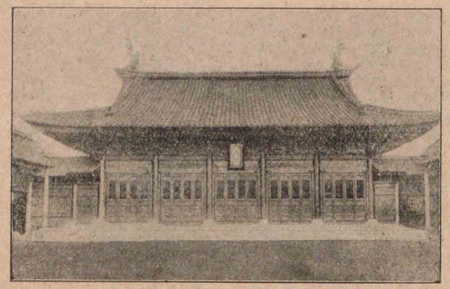
徳川綱吉の好學

湯島の聖堂

第九章　文教の振興

近世の文教　近世に至り、平和がつゞき、民衆の生活程度も高まるにつれ、文教が振興せられ、學問・藝術は長足の進歩を遂げた。

幕府の學校　徳川家康は學問を好み、藤原惺窩を召してしば〳〵書を講ぜしめ、殊に林羅山を重用して、幕府の儒官となし、朱子學によつて文教を振興することに努めた。



東京湯島の聖堂

將軍綱吉も亦好學の志厚く、江戸上野忍岡にあつた林家の私塾弘文館を湯島に移した。このとき曩に家康の子徳川義直が弘文館内に建てたる孔子廟も亦湯島に移されて聖堂と稱せられ、その前の坂を昌平坂

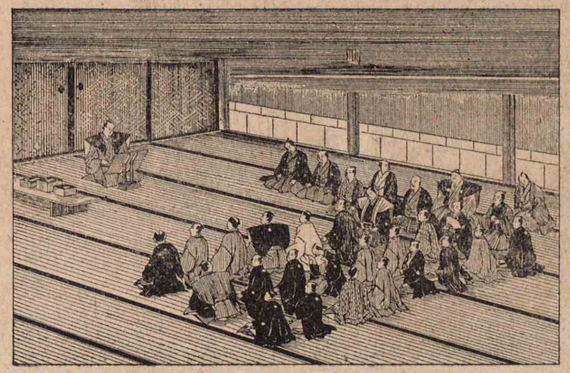
昌平坂學問所

昌平黌

と呼ぶこととなり弘文館は昌平坂學問所といはれ、幕府の保護を受けて文教の中心たる地位を占め、林鳳岡が大學頭となつてこれを統べた。昌平坂學問所はまた昌平黌ともいはれる。その後、將軍家齊の就職のはじめ、老中松平定信は、大いに昌平黌の學風を刷新し、教學の統一を圖つた。

佛教

佛教　近世、鎖國政策によつて、外部の刺戟を遠ざけられた國民は、文教の振興するに伴ひ、徐ろに過去千數百年間に取入れた外來文化を消化することに努め、それを基礎として更に一段の進歩を遂げたのであつた。過去に取入れた外來文化の主なるものは儒教と佛教



湯島聖堂講釋の圖

神儒佛三教

佛教の普及

崇傳
天海

儒教

崇傳

天海

とであつた。これに固有の神道を合せて、世に神儒佛三教といつた。佛教の新しい宗派は、たゞ黄檗宗が明の僧隱元によつて齎されただけであつたが、幕府は天主教を禁壓するために佛教を保護し、すべての人民を必ずその中の一宗に歸依させ、宗門帳をつくつてこれを明記せしめたから、佛教は全國津々浦々に至るまで殘る隈なく普及した。幕府はまた大きな寺々には法度を下して取締りを嚴しくし、寺領を與へて保護を加へた。家康に重く用ひられたものに禪宗の崇傳、天台宗の天海などがある。將軍家光に尊敬せられた澤庵もまた名僧である。

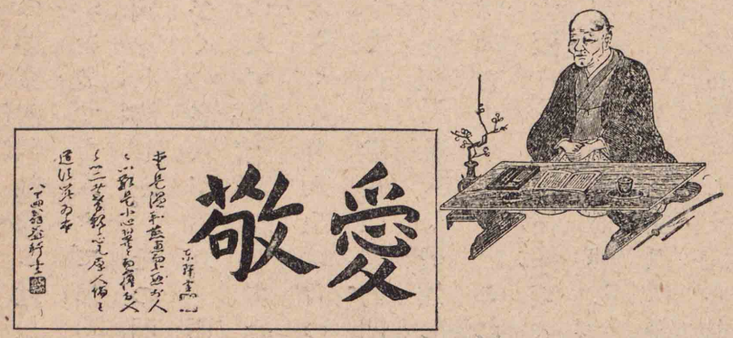
儒教　佛教に新宗派の殆んど興らなかつたのに對し、儒教には

朱子學
陽明學
中江藤樹
伊藤仁齋
荻生徂徠
古學
日本的學派
貝原益軒とその妻東軒

多くの學派が竝び立つて空前絶後の盛況を呈した。その中、朱子學は幕府の保護の下に盛んになつた。これに對し陽明學は、將軍家光の頃、近江に出た中江藤樹によつて振ひ起され、民間における一つの學派として發達した。しかし朱子學と陽明學とは、いづれも宋・明の學問であつたところ、伊藤仁齋・荻生徂徠などは、やがて遙にその源流に溯り、直ちに孔孟の眞思想に迫らうとして古學を唱へ、支那の學者の企て及ばなかつた道を開拓した。古學は非常な卓見であつたが、まだ傳來的な感じがある。然るに山鹿素行・山崎闇齋・徳川光圀などは、國家觀念が極めて厚く、儒教を日本化し、國民道徳を養ふことに努めた。その他貝原益軒・木下順庵・新井白石・室鳩巣などは、いづれも名高い學者である。

貝原益軒は、平易な文章で、多くの有益な教訓書を著し、一般士民に大きな感化を與へた。その妻は東軒と號し、才學の秀でた婦人であつた。こゝに掲げたのは益軒八十四歳東軒六十二歳のときの合作である。愛と敬とは人倫の本たることを述べたものである。

文學
平民藝術
元祿時代
俳諧
松尾芭蕉



貝原益軒

益軒及び東軒の筆蹟

愛

愛是溫和慈惠、而不惡於人之心。

東軒書

敬

敬是小心翼々、而不慢於人之心。
二者、孝親之心。凡厚人倫之道、須以此爲本。

八十四翁益軒書

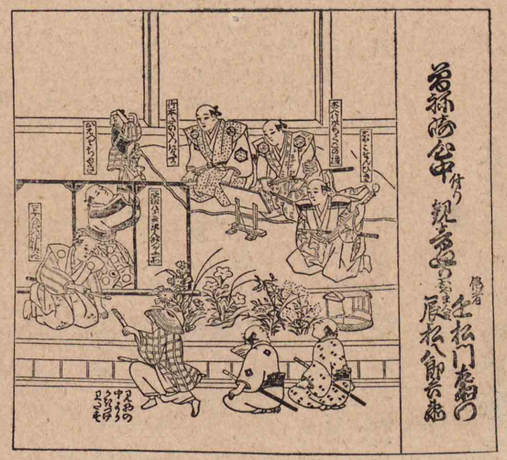
またその畫像は益軒六十五歳のときの壽像である。

文學

江戸時代には町人が勃興して來たので、平民藝術が大いに發達した。元祿時代における俳諧の松尾芭蕉、小說

小說　井原西鶴
戲曲　近松門左衞門
淨瑠璃　竹本筑後掾
歌舞伎芝居

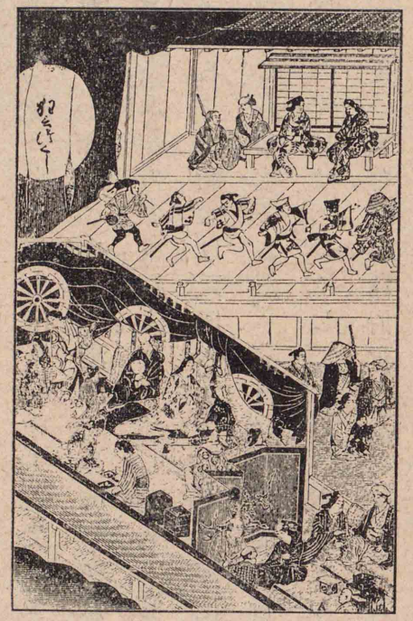
の井原西鶴、戲曲の近松門左衞門などは、先づ平民文學のために光彩を放つた人々である。芭蕉は伊賀の人で、江戸に出て、好んで諸國を行脚した。その門下からは多くの名人が出た。西鶴は大阪の人で、浮世草紙と稱せられる小說をつくり、人生社會の眞相を描寫した。近松門左衞門は、長い年月を經て、徐々に發達して來た淨瑠璃を大成した。これと同じ頃、大阪に竹本筑後掾(義太夫)が出て淨瑠璃節を振ひ興し、竹田近江が出て、操芝居を立派に發達せしめた。淨瑠璃と並んで歌舞伎芝居も亦目覺ましく進歩した。歌舞伎は、慶長の頃の阿國歌舞伎から



操芝居

明和時代
文化文政時代
小說

起り、元祿時代に入つて、江戸に市川團十郎が出で、京都に坂田藤十郎が出づるに及び、舞踊所作の域を脫して演劇の形態を具へるに至つた。尙ほ、その後の文學藝術には、明和頃を中心とする時代と文化文政頃を中心とする時代とあり、共に名家が輩出した。小說では明和の頃の上田秋成・建部綾足・平賀鳩溪、文化文政の頃の山東京傳・式亭三馬・十返舍一九・瀧澤馬琴・柳亭種彥・爲永春水などは殊に名高い人々である。上田秋成は大阪の人であるが、建部綾足・平賀鳩溪に至り、從來、主として京阪に發達した平民文藝は、江戸文藝として美しい花を



菱川師宣筆演劇の圖

俳諧

川柳

谷口蕪村筆旅人渉溪の圖

に乘じた人であつて、その生涯の作品には、洒落本・黄表紙・讀本等の變化がある。式亭三馬・十返舍一九は、その滑稽味の方を受けつぎ、爲永春永は、その人情味の方を發展させた。瀧澤馬琴・柳亭種彦は讀本の方で雄編大作を成した人々である。俳諧では天明の頃、谷口蕪村が出てこれを復興した。蕪村は畫を能くし、その作品は洒脫にして神韻に富んでゐる。その頃、俳諧が通俗化した川柳が盛んに開くに至つた。山東京傳は、その潮流

大田南畝

狂歌

民衆の間に行はれ、狂歌にも大田南畝をはじめ、多くの名人が輩出した。

美術

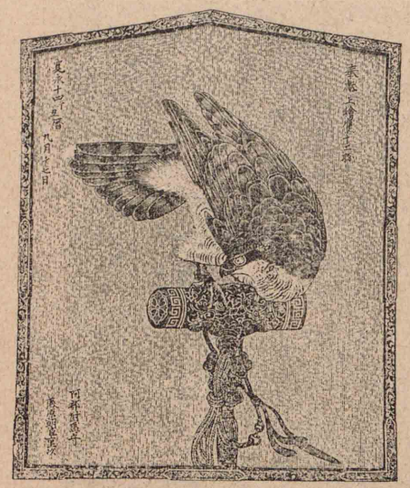
狩野探幽

土佐光起

美術　近世初期の美術は桃山時代の美術に現れた豪放壯麗なる精神を承けたものであり、狩野探幽・土佐光起等は、この精神を體現して出た巨匠である。探幽は漢畫を基礎として大和畫を攝取し、光起は、大和畫を基礎として漢畫を攝取し、共に高尚なる氣韻を躍動せしめたが、それ等の子孫は固陋に流れて不振に陷つた。これに反し、浮世繪は、勃興して來る町人階級と伴つて、清新なる一路を進んだ。浮世繪には肉筆と版畫とがある。肉筆の浮世繪は戰國時代の末頃に

浮世繪

肉筆浮世繪



狩野探幽筆鷹の圖

狩野秀頼

岩佐勝以

源を發し、近世初期に至り、大成したものであり、狩野秀頼等を先驅とし、元和・寛永頃には、殊に多くの作品が出た。當時、これを翫賞したものは、概ね武家貴族であつたから、浮世繪もこれに相應はしい氣韻を有する。井伊家の彥根屛風・尾州德川家の歌舞伎草紙等の類である。これ等の作家の中、岩佐勝以は殊に多くの名畫を成し、知らず識らず、浮世繪の先達となつた。尾州德川家の士女遊樂圖小屛風・川越喜多院の三十六歌仙扁額などは、その傑作である。やがて時代の移り變りに伴ひ、町人が浮世繪を愛翫するやうになるに及び、濃艶の趣が加はり、元祿時代の菱川師宣を生ずるに至つた。

狩野秀頼筆高雄觀楓の圖

土佐光起筆　鵜圖屛風　福岡子爵家所藏

土佐光起は近世初期に出で狩野・土佐・光起の三家の畫風を參酌して、成し大家の畫風に新生面を開き、殊に鵜を描くことに於いては、その妙を極めたり。この屛風は、近世初期の作者の特徴を發揮してゐる鵜の姿態を、遠山の遠かに、中景に、數羽の鵜を描き、面白く、秋霧の立ち籠めるなかに群れ遊ぶ鵜の姿態を、巧みに、寫し出してゐるものである。畫題は、鵜圖であり、作者の名は、世に、高く、聞こえてゐる。

描寫して能く作者の特徴を發揮してゐる。

りまず。

土佐光起筆　鶉圖屏風

（福岡市博物館所藏）

土佐光起筆　鶉圖屏風　福岡市博物館所藏

土佐光起は江戸中期の宮廷画家で、土佐派の画風を復興した人物です。この屏風も光起の代表作で、画面全体に秋の野の風情が漂っています。鶉の羽毛の一つ一つまで丁寧に描かれ、背景の草花とともに、静かな秋の気配が伝わってきます。鶉は古来、和歌や物語にも登場する秋の鳥であり、この屏風を見る人は、歌の世界を思い浮かべながら、秋の野を散策しているかのような感覚を味わうことができます。絹本に彩色を施した作品で、保存状態も良好です。

彦根屏風

伯爵　井伊直忠氏所藏

彦根屏風は舊彦根藩主井伊伯爵家に所藏せられる六曲の小屏風で、極彩色を以て江戸時代初期の風俗を描いたものであります。この種の風俗畫は、桃山時代の中頃から、慶長・元和・寛永に亘つて盛んに描かれたものでありますが、彦根屏風は、これ等の作品の中で特に最も傑出した神品であつて、著想・構圖も、描線も、色彩も共に精妙をきはめ、藝術の極致に達してをります。製作年代は寛永頃でありませう。茲に掲げたのは六曲の中の向つて右方の二曲の部分でありまして、婦女の髪の結ひ方、著物の柄合、先端に總のある細い卷帶などが、能くその時代の特色を示し、自由なる姿態に變化の妙をつくしてをります。

由なる後頭に鬱分の効をひへつたさります。

其鶴に鶴のもる醋て多帯をうた、頭へうの柳分の鶴白を示す、自古七の二曲の語化かもりまつた、橋火の鬱の語なり七、著色の鶴合、分れ貫氣火現かもりまかも。越に鶴やかのれ大曲の中の回ひと淡も其に鶴歌さをれる鬱論の鶴袋に鶴つたさります。鬱分手品の中か鶴に貫も鬱出つた順品かもひた、著島鶴圖も、甚鶴も、句の鶴ひた鶴らに甚の鶴かもりまます。逝鶴鳳れ、つ鶴の鶴鳳凰分の中現ゃこ鬱夏、京博貫火に豆ます。この酒の鳳鶴鶴れ、鶴山鶴分の中現ゃこ鬱夏、京博貫火に豆ます。

鳳凰鶴鶴主其鶴白以ったもかもります。

鳳凰鶴鶴

白鶴　其中画忠氏所藏

彦根屏風

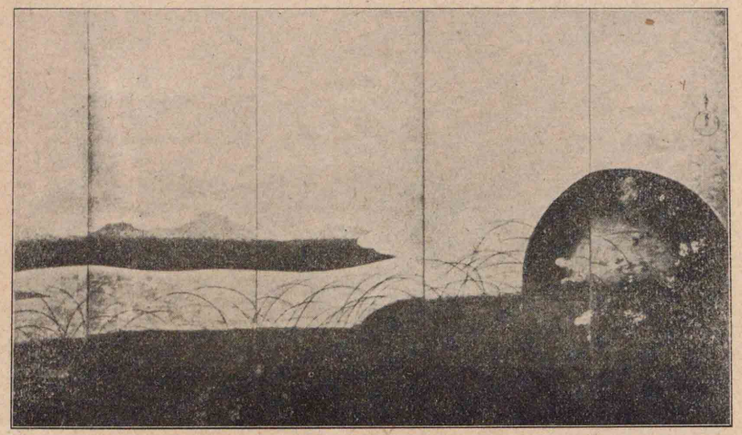
（伯爵井伊直忠氏所藏）

版畫浮世繪

本阿彌光悅

俵屋宗達

尾形光琳

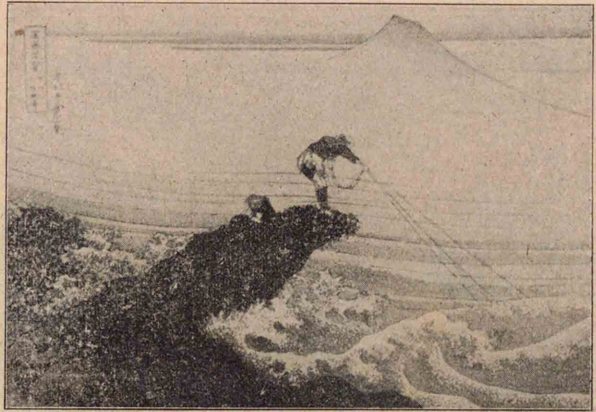


俵屋宗達筆武藏野の旭日

師宣はその畫を木版に附して、遍く世人の翫賞に供し、版畫の浮世繪は、これから大いに起つた。これより先、慶長・元和・寛永の頃、京都に本阿彌光悅があり、刀劍の鑑定を善くし茶道に通じ、書においては一流を開き、畫においても飄逸清雅の風格を備へてゐた。また寛永の頃、京都に俵屋宗達があり、豪放華麗なる大作を殘した。元祿時代に至り、尾形光琳は、また京都に出でて光悅宗達の風を繼ぎ、勝れたる意匠と、手法とを以て、美

英一蝶
浮世繪の流派
歌川豊國
葛飾北齋
安藤廣重
喜多川歌麿
圓山應擧

しき多くの名作を成し、濃艶豊麗なる趣を極めた。　江戸の英一蝶も俊逸豪華なる畫風を以て現れた。　浮世繪は、菱川師宣の後、多く



葛飾北齋筆甲州の富士

の流派が相ついで起り、明和・安永・天明の頃に至り、木版錦繪の黄金時代を現出し、文化・文政・天保の頃には、歌川豊國・葛飾北齋・安藤廣重・喜多川歌麿等の巨匠が輩出した。　豊國は、演劇の盛んな時に出て、役者繪の名手となつた。　北齋と廣重とは、人物風俗ばかりでなく、風景畫を描いて古今獨歩の觀がある。歌麿は優艶典麗な畫風を以て秀でてをつた。　その前後に亙り、畫壇に圓山應擧・池大雅・谷文晁・司馬江漢等が現れた。　應擧は、京都に出て、寫生

尾形光琳筆屏風繪

（男爵岩崎小彌太氏所藏）

尾形光琳筆風畫

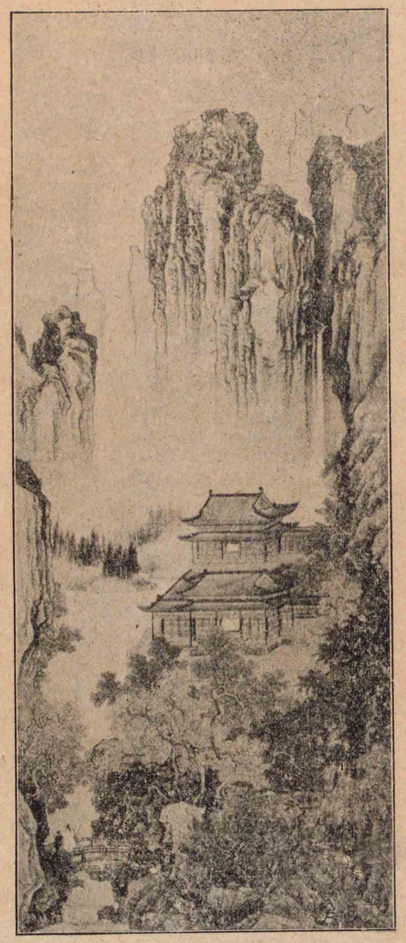
男爵　岩崎小彌太君所藏

琳派の畫風を繼承して、獨自の新境地を開いた人物である。琳派は、光琳の弟乾山を中心として、宗達・光琳・乾山の三人を中心とする一派で、その畫風は、大和絵の伝統を基礎として、金箔・金泥・彩色を用ひ、装飾的効果を重んじ、簡潔・明快・優美・洗練の特徴を有する。この畫風は、後世の琳派の人々に、大いに影響を與へ、酒井抱一・鈴木其一・中村芳中・渡辺崋山等の諸家を出だした。琳派は、光琳の畫風を、その特徴として

池大雅

谷文晁

を重んじて新生面を開き、圓山派の畫風を創めた。大雅も京都に出で、文人畫の大家として氣韻に富む作品を殘した。文晁は江戸で名を成し、諸流の長所を鍾めて一派の畫風を開き、殊に山水畫に



谷文晁筆樓閣山水

司馬江漢

織物

陶磁器

その妙趣を發揮した。江漢は、西洋畫を修め、油繪銅版畫を描き、畫界に新たなる生味を鼓吹した。そのほか織物では、友禪染・透綾・銘仙等、陶磁器では、七寶燒・九谷燒等いづれも精巧の域に進んだ。こ

武家の婦人

武家婦人の修養

れ等は皆鎖國時代において、日本趣味によつて發達した美しい收穫である。

武家の婦人　近世の社會機構は、封建制度を基礎とするものであり、武家・町人・農民等の身分上の差別が極めて嚴重であつた。その中、武家は中堅をなす身分であつたから、一般に修養の度が高く、當時の國民文化は、武家を中心として成立つてをつた。されば、武家の婦人も、亦常に修養に努め、その上流に位するものは、和歌・國文・書畫・音曲をはじめ、茶の湯・活花・香道等を修め、禮儀・作法に通じ、淑德を重んじ、高尚なる氣品を保ち、同時に薙刀・小太刀・弓術・馬術等の武藝を學んで、有事の日に備ふる用意を怠らなかつた。中流以下に屬するものも、同じ心掛を以て、それ〴〵學問・藝能・武術等を磨いた。これ等の修養は或は師匠を聘することあり、或は師匠の許に通ふことがあるが、要するに家庭において行はれたのであり、母は子女

教育の方針

家本位の生活

に對する教育の責任を有し、自ら修めると共に、その子女を指導する見識を有し、武家たるに恥ぢざる教養を與へるのであつた。その教育の方針は、主君に忠を盡し、家名を揚げることを旨としたものであつた。それは封建制度は、主從の結合によつて成るものであり、家臣たるものは主君より一定の家祿を給與せられ、それによつて祖先以來の家系を存續せしめるのであつたからである。隨つて女子は家を以て生活の本據となし、一旦嫁げば、その家を以て自己の死所と定め、良妻賢母たることを本道とし、敢て自ら社會の表面に立つて活動することがなかつた。されば個人として勝れた才能を有する婦人も少くなかつたけれど、特殊な境遇に立つもののほかは、進んでその才能を發揮させようとはせず、深く光を晦んで家庭に沒頭するのが常であつた。將軍家光に仕へた春日局・將軍綱吉の母桂昌院夫人等はその境遇上、自ら世間的に影響を及

ぼした人々であるが、多くの婦人は赤穂義士の妻や母などのごとく、自分は背後にありて、夫や子などをして世間で働かしめることを常道となしてをつた。

赤穂義士の背後にある婦人

赤穂義士が大石良雄に率ゐられ、吉良義央を討つて、亡君淺野長矩の讐を復したのは、名高い話であるが、その背後には、多くの女性の涙ぐましい心勞と激勵とがあつた。小野寺十内（秀和）の妻丹女、大高源五（忠雄）の母貞柳尼などは、その例である。

十内は、文雅の士で、儒學を修め、和歌に秀でてゐたが、丹女も歌才に富み、

咲き初むる外山のさくら匂ひ來て人おどろかす春の朝風

といふやうな歌がある。主家の變事に會ひて後、夫を助けて具に苦心を重ね、九十餘歳の老母の逝去を見送り、夫が本望を遂げて切腹した後間もなく、

夫や子の待つらんものを急がまし何かこの世に思ひおくべき

といふ辭世を殘し、食を斷ち、夫の後を追うて歿した。貞柳尼は、小野寺十内の姉、大高兵左衞門の妻である。その子源五は文學の嗜み深く、俳諧の道に通じて俳名を子葉と號し、母に仕へて孝養を盡した。源五が義擧に參加して終始志を渝へず、つひに本望を遂げるに至つたのは、母の激勵に負ふところが大きかつたのである。

文藝にて名を成せる婦人

荒木田麗女

玉蘭

近世にも文藝において名を成した婦人は少くないが、それは寧ろ武家以外の人々であつた。荒木田麗女・池大雅の妻玉蘭などはその例である。

荒木田麗女は皇大神宮の祠官の女である。詩歌を善くし國文・國史に通じ、夫と共に學問を勵み、各地を巡遊して名所・史蹟を尋ねた。その著「月のゆくへ」は、高倉天皇・安德天皇御二代の間のこと、「池の藻屑」は、後醍醐天皇の御代より後陽成天皇の御代に至る間のことを記せる國文の歷史である。文化三年歿す。年七十五。

玉蘭は、名を町といふ。清貧に甘んじて大雅を助け、つひに天下に大名を馳せしめた。自らも亦畫才に富み、夫妻共に才名を謳はれた。天明四年歿す。年七十八。

婦人の風俗

宮廷の婦人

武家の婦人

婦人の風俗　近世の國民生活は次第に複雜となつたので、身分と時代とにより、婦人の風俗にも多くの變遷があつた。宮廷では、正裝の場合には、十二單が襲用せられたが、平常は、髮を下げて「おすべらかし」とし、前髮を取り、鬢を膨らませ、長き髢を入れ、繪元結で肩の下のところを結び、眉を剃り、別に黛で眉を描いた。武家の上流

民間の婦人

武家婦人の盛装

民間の婦人風俗

婦人は殊に華麗な服装をなした。こゝに掲げたのは、近世末期に用ひられた盛装であり、緋縮緬の衣服を着け、縮緬の帶を締め、白綸子の打掛を羽織り、箱世古を懷に挿み、葵髷といふ髪を結んでゐる。宮廷・武家等は、因襲故實を重んずるために、その風俗の變遷は割合に緩漫であつたが、民間の婦人風俗はこれと異り、髪の結ひ樣、髪飾の諸道具、帶の幅の廣狹、その結び樣、衣服の種類、その模樣、履物の形など、常に目まぐるしい程に變化を重ねた。

俗風見花戸江代時祿元筆宣師川菱

菱川師宣筆元祿時代江戸花見風俗

これは菱川師宣筆風俗繪卷の中の一場面であります。處は江戸上野の山内(今の上野公園内)爛漫として咲き匂ふ櫻の木立に屏風を立て、幔幕を張り、芝生の上に毛氈を敷き、大名の奥方らしい婦人が遊宴を催してをります。琴を彈くもの、鼓を打つもの、三味線を彈くもの、踊るもの、いづれも泰平の春を樂しんでゐる風情であり、その頃の人々の服裝や風俗が巧みに描かれてをります。

原畫は東京帝室博物館の所藏であります。

第十章　尊王思想の勃興と明治維新

尊王思想の發達

尊王思想の發達　皇室を尊崇したてまつる考を世に尊王思想といつた。この尊王思想は、われ等の祖先より子孫永代にかけて、胸より胸に、さながら涌き出づる眞清水のやうに溢れ漲り、たまたま巖礁に突き當ることがあれば、飛沫高く天半に躍り、天日これに映じて燦然たる色彩を現ずるのであつたが、江戸時代において、この道徳的感情・宗教的信仰を養ひ育てた力は、儒教と國學と國史と神道とであつた。

儒教と尊王思想

儒教と尊王思想　儒教は常に王道を尊び、覇道を賤むべきことを教へてゐる。王道は道徳政治であり、覇道は權力政治である。これをわが國の狀況に當てて見ると、皇室は徳を以て國民を撫で

尊王賤覇の思想

慈しまれるのであるから、卽ち彼れの王者に當り、武家は力を以て國民を抑へつけるのであるから、卽ち彼れの覇者に當り、尊王賤覇の思想は、卽ち皇室を尊崇し、天皇親政の世に引戻さうとする熱情を喚び起すのである。

山鹿素行

山鹿素行は、わが國を以て萬國の中心にあるものとなし、これを支那に比較すれば、わが國が萬世一系の皇統を戴いてゐることは、易姓革命の國である彼等の及びもつかない點であるといつて、支那崇拜を排斥した。

山鹿素行

素行は嘗て播磨赤穗藩淺野家の賓師であつたが、後、言說によつて罪を得て赤穗に謫居した。そのため赤穗藩の君臣は素行によつて薫陶せられたところ多く、大石良雄以下の義士を生ずるに至つたのも此處に淵源があるといはれてゐる。

國學と尊王思想

古道の闡明

國學と尊王思想

國學は古典を研究して古道を闡明する學問であつた。その古典、卽ち古事記・日本書紀・萬葉集などは、武家がまだ發生せず、院政も行はれず、攝政・關白の政治も無かつた頃の國民生活の有樣を傳へるものであり、そこに流れる古道は、卽ち純眞なる皇室尊崇の精神であるから、國學を修めるものは、自ら古代に憧れ、尊王心が盛んになるのである。世に國學の四大人と稱せられる荷田春滿・賀茂眞淵・本居宣長・平田篤胤などは、いづれも皇室中心のわが國家を愛護する念が強く、春滿が、「踏みわけよ日本にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ人の道かは」と歌ひ、宣長が、「敷島の大和心を人とはゞ朝日に匂ふ山ざくら花」と詠じたごときは、強烈なる國民的自負を高調したものといふべきである。

國學の四大人

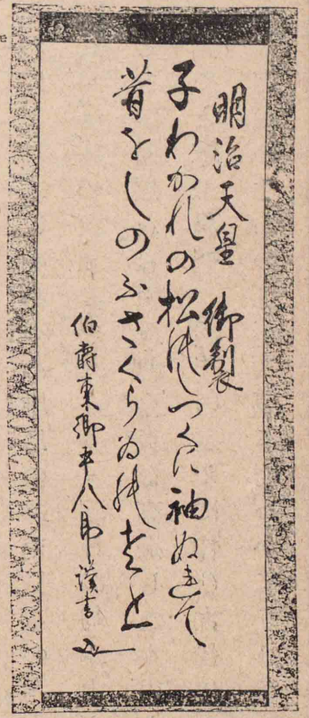
本居宣長

國民的自負

國史と尊王思想

國史と尊王思想

國學の進歩に伴ひ、古代史の研究が大いに進み、わが國の生命の源が次第に明らかにされた。徳川光圀は大日



本史を編して、大義名分の重んずべきことを鼓吹し、降つて頼山陽は日本外史を著し、燃ゆるがごとき熱情を以て尊王論に氣勢を添へた。そして天皇親政を理想とした建武中興・吉野時代の歴史に對する憧れが盛んになり殊に楠公崇拜の風が大いに起り、光圀は「嗚呼忠臣楠子之墓」と題する墓碑を建て、明の遺臣朱之瑜が楠公父子櫻井驛訣別の圖に題せる賛文をその碑陰に刻して公の誠忠を顯彰し、世人に多大の感動を與へ、山陽は日本外史において、楠公の盡忠報國の大精神を發揮し、人を驅つて君國の急に馳せ參ぜしめずんば已まない概があつた。

楠公崇拜

神道と尊王思想

垂加神道

復古神道

山崎闇齋

神道と尊王思想

若し夫れ神道に至つては、古代の純眞なる日本精神を酌んで來て、神國日本の尊嚴を發揮し、現人神としての天皇の御威德を宣揚したてまつり、光彩陸離、四力の闇黑を照破する氣魄がある。されば、これを修めるものは、憂世慨國の情を禁ずることが出來ず、國體の本義を明らかにし、敬神尊王の信念を打立てようと努めるに至るのであつた。そして山崎闇齋の創めた垂加神道の流の中から、竹内式部が出て多くの公家衆を動かし、山縣大貳もその流に浴して倒幕の氣運を助長し、平田篤胤の復古神道は明治維新に大きな貢獻をなした。

櫻井驛楠公父子訣別の碑

山崎闇齋は、はじめ僧となつたが、後、還俗して儒者となり、晩年更に神道に入つて垂加神道を創め、大いに日本精神を宣揚し、熱烈なる尊王思想を鼓吹した。或時門弟

竹内式部

寶暦事件

奉公心得書

達に向ひ「若し孔子が大將となり、孟子が副將となり、大擧してわが國に押寄せて來たならば、我々孔孟の道を學ぶものは如何すべきか」と問うた。門弟達は當惑して返事が出來ず「先生は如何なさいますか」と反問した。すると闇齋は毅然として「不幸にして、そのやうな場合に出遇ふならば、潔く一戰を遂げ、孔孟を虜にして國恩に報いようと思ふ。これが卽ち孔孟の道である」と言つた。

竹内式部は桃園天皇の御代の人である。多くの公家衆を集め、垂加流に基いて神典(日本書紀神代卷)を講じた。その講義を聽いた公家衆は、深い感動を受けて、心に王政復古の理想を懷き、御少壯にわたらせらるゝ英主桃園天皇に、また神典の御進講をなした。然るに五攝家の人々は、幕府の聞えを憚り、かくては天皇の御爲に宜しくあるまいと考へ、天皇をお諫め申し上げ、多くの曲折を經て、寶暦八年、二十人の公家衆を君側より斥け、また京都所司代をして式部を取調べさせ、式部はつひに追放に處せられた。これを寶暦事件といふ。式部は熱心なる神道學者で、その著奉公心得書の中には、尊王の大義を說き、忠孝兩全は最も望ましいものであるが、萬一、兩つながら全くすることの出來ない場合には、斷乎として、孝を捨てて忠を取るべきであるとなし「故に此の君に背くものあれば、親兄弟たりといへども、卽ち之を誅して君に歸すること、吾國の大義なり」と喝破してゐる。實にこれわが國民道德の

蘭學と開國思想

自然科學等の研究

本多利明

佐藤信淵

渡邊崋山

高野長英

大義である。

蘭學と開國思想

尙ほ、尊王思想の發達と相待つて、明治維新を導き出すのに力のあつたのは、蘭學の進步によつて惹き起された開國思想であつた。蘭學は、醫學の方面から開け始めたが、その研究の進むのに隨ひ、博物學・理化學・天文學・地理學・兵學等が修められ、蘭學者は、最も能く西洋の事情に通ずるやうになり、寬政・文化の頃の本多利明・佐藤信淵・天保の頃の渡邊崋山・高野長英などは、書を著して經世開國の策を論じ、外交に關する意見を說いた。

渡邊崋山

本多利明は、世界萬國の形勢を述べて鎖國の陋習を打破しようとし、造船・航海の術を奬勵して植民地開拓の必要に及んだ。佐藤信淵は、國家觀念を明らかにし、產業を發達させ敎化を振興し、武備を整へ、國威を海外に發揚すべきことを說いた。渡邊崋山・高野長英は、いづれも幕府の鎖國的外交を不可としたので、幕府に捕へ

られ、崋山は自殺し、長英は一旦脱走したけれど、後年、捕吏に追跡せられて自殺した。その他幕末に活躍した人々の中には、蘭學を修め、開國進取の長計を圖るものが多かつた。

諸外國との關係

諸外國との關係　國内において、尊王論が發達し、開國思想も養はれて來たとき、國外からは諸外國が相ついで渡來し、わが國を列國の競爭場裡に導き出さうとした。こゝにおいて、鎖港・開國の論が盛んに起つたが、曩に蒸氣船が自由に遠洋を航海するやうになつてから、世界の形勢は一變してゐるので、わが國も亦この大勢に引きつけられ、幾多の紛亂の後、安政五・六年に亙り、時の大老伊井直弼は亞米利加合衆國を始め、多くの國々との通商假條約に調印するに至つたのである。

鎖港・開國の論

大勢の指導

尊王攘夷論

櫻田門外の變

尊王攘夷論　然るに直弼には、その他にも專斷の行ひがあり、つひに志士の反感を招き、櫻田門外で殺された。これより尊王攘夷の論が一層盛んになり、長州藩士などは、討幕を企てたが成らず、それより多くの紛爭を經て、幕府は長州藩を伐つこと前後二回に及んだが、つひに功を奏せず、慶應二年、朝廷は命じて戰をとゞめさせられた。

長州征伐

一八六六年

大政奉還

一八六七年

大政奉還　慶應三年正月、明治天皇が御踐祚あらせられた。これより先、薩州・長州の二藩は密かに聯合し、薩州藩士西鄕隆盛・同大久保利通・長州藩士木戸孝允等は、岩倉具視及び三條實美等と謀を通じ、幕府を倒して王政復古の大業を成さうと思ひ著著その計畫を進めた。前土佐藩主内山豐信は、形勢の非常に切迫したのを見て、その臣後藤象二郎等を遣はして、政權を朝廷に還したてまつるべきことを時の將軍德川慶喜に說かしめたところ、慶喜も内外の事

三條實美

討幕の計畫

王政復古の大號令

明治維新と女性の貢獻

西郷隆盛

情を考へて、固く意を決し、つひに上奏して大政を奉還しまゐらせた。それは實に慶應三年十月十四日のことであつた。天皇は翌日これをお允しなされた。尋いで十二月九日、朝廷は攝政・關白・征夷大將軍等を罷め、新たに總裁・議定・參與の三職を置き、すべて神武天皇御創業の精神に基き、天皇親政の旨を明かにせられた。世にこれを王政復古の大號令といふ。尋で翌年明治と改元せられたので、この變革を、世に明治維新といふ。

明治維新と女性の貢獻　幕末維新の際、尊王の志士が全國に蹶起し、一身一家を顧みることなく、東西に奔走して國事に力を盡した間に立つて、尊王の大義に據つて、君國のために働いた婦人が少くない。近衛家の老女村岡・若江薫子・松尾多勢子・野村望東尼等は、

老女村岡

若江薫子

松尾多勢子

その名高い人々である。

近衛家の老女村岡は、本名を津崎矩子といふ。夙に、朝威の振はないことを慨き、外國船が相ついで來つて天下騷然たるとき、尊王の志士達を助けて國事に力を盡し、安政六年、幕府に捕へられて江戸に送られた。時に六十四歳であつた。しかし間もなく免されて歸京し、洛外の嵯峨に退いて靜かに晩年を過し、明治五年、功により朝廷より終身現米二十石を賜り、翌六年歿した。年八十七。後、從四位を贈られた。

思ひきや數ならぬ身のかくまでにふかき惠の露かゝるとは

若江薫子は伏見宮に仕へた若江量長の女、和漢の學に通じ、詩歌に秀でてゐた。一朝威を振ひ興さうとして、尊王の志士を助け、捕へられて獄に下つたことがある。一條家に仕へ、昭憲皇太后の御入内前、御勉學の御相手を奉仕した。明治十四年歿した。年四十七。

末の代も御裳裾川は絶えやらじとの天地のあらんかぎりは

松尾多勢子は信濃の人、尊王心厚く、文久二年、夫に請ひて、京都に上り、公家衆に近づき、志士と交り、幾たびも危地に出入して國事に奔走した。夫の病死した後、歸鄉し、志士數十人を匿まつて大義のために力を盡し、明治元年、また上京して、わが子を官軍に從軍させ、その後鄉里にあつて農業・養蠶等を振興することに努め明治二十七

野村望東尼

年歿した。年八十四。後、正五位を贈られた。

野村望東尼は名をもとといふ。筑前の人、國文を修め、和歌を善くし、尊王愛國の念が厚く、夫の死後、文久元年、上京して政界の風雲の急なる有様を見聞し、歸郷の後、その住居なる福岡城外の平尾山莊に多くの志士を匿まひ、しば〳〵危難を免れしめた。慶應元年、福岡藩で佐幕論が盛んであつた頃、捕へられて玄海の孤島に流されたが節を守つて屈せず、同二年、嘗て庇護を與へたことのある志士達によつて救ひ出されたが、同三年歿した。年六十二。後、正五位を贈られた。

和宮の御高德

御降嫁

和宮の御高德　取り分け感激に堪へないのは、和宮親子内親王の御高德である。和宮は仁孝天皇の第八皇女、孝明天皇の皇妹でいらせられる。大老井伊直弼が斃れて後、公武合體論が勢を得、老中安藤信正等は、衰へゆく幕府の威信を回復するために、和宮が將軍家茂に御降嫁あらせらるゝようにと朝廷にお願ひ申し上げた。天皇は色々お考へなされて後、その請をお許しになり、宮は國家のために御決心をあそばされ、文久元年、江戸にお下りになられた。

靜寛院宮

德川家存續の御歎願

薨去

日本婦道の權化

時に御年十六歳でいらせられた。それより宮は江戸城の大奥におはしまして、貞節を盡されたが、世の中が變つて慶應二年、家茂は第二次長州征伐の最中、大阪城において薨じた後、宮は薙髪して靜寛院宮と稱せられた。そして明治元年、官軍が東下して江戸に迫つたとき、宮は國家の將來を憂へられ、德川慶喜の恭順を訴へて德川家の存續を朝廷に歎願し、舊幕臣を鎮撫して江戸を戰禍の巷から救ふことに心肝を碎かれた。そして萬事が無事に解決して後、一旦京都にお還りになつたが、また東京にお移りなされ、明治十年、薨去あらせられた。御年三十二。入つては夫君に貞節を盡し、出でては國運の安危を思ふ。和宮は實

靜寛院宮（和宮）

に日本婦道の權化でいらせられる。

和宮の御歌

將軍家茂の靈柩と共に、家茂が宮のために生前買ひ求めておいた西陣織の一卷が江戸城に屆いたとき宮は、

空蟬の唐織ごろも何かせむ綾も錦も君ありてこそ

と詠じて悲しまれた。また鏡に對して、

よそほはん心も今はあさ鏡向ふかひなし誰がためにかは

と詠まれた。國家國民のために御身を犧牲にしようとせられる御心は、惜しまじな國と民とのためならば身は武藏野の露と消ゆとも

といふ一首に能く現れてゐる。御墓は東京芝增上寺にある。

明治維新の精神

復古的思想

創造的精神

五箇條の御誓文

一八六八年

第十一章　立憲政治の確立

明治維新の精神　明治維新の精神には、前段と後段とがあつた。前段は復古的思想であつて、祖神崇敬の信念を基礎とし、神武天皇御創業の大精神を宣揚し、皇室中心の國體を力强く養ひ育てようとするものであり、後段は創造的精神であつて、將來に向つて新たなる生活樣式を建設しようとする氣分であつた。その創造的精神が政治の方面に現れては、內にしては皇室中心の立憲政體が確立し、外にしては國力が伸張し、國際的地位は高まり、國威は全世界に發揚せられるやうになつた。

五箇條の御誓文　明治維新の創造的精神は、さながら大河の流のごとくに盛んなものであつた。されば明治天皇は、これより將來らんとする世の中をお導きあそばされようとして、明治元年

開國進取の國是

（慶應四年九月改元）三月十四日、親しく紫宸殿にお出ましになり、文武の諸官を率ゐて天神地祇を祭られ、五事をお誓ひあらせられ、開國進取の國是をお定めになられた。世にこれを五箇條の御誓文と申し上げる。乃ち御誓文を群臣に宣示して、次の詔をお下しになられた。

一廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ
一上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
一官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス
一舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
一智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

群臣は皆宏遠なる聖旨に感銘し、臣道を全くして宸襟を安んじたてまつらむことを誓ひ、一人づつ進みて神位竝びに玉座を拜し、誓約書に署名しまゐらせた。

官制の改定

一八六九年

官制の改定　王政復古のとき、朝廷は新たに總裁・議定・參與の三職を置かれたが、その後、新時代に適當する仕組を考へられて、しばしば官制を改められ、明治二年七月には、古の大寶令に基いて、官制を改められた。また明治二年六月には版籍奉還、同四年七月には廢藩置縣が行はれて全國統一の政治が成立し、同六年一月には徴兵令が布かれて國民皆兵の制度が確立し、國歩はます〳〵健全なる進行をつゞけるに至つた。

民選議院設立の運動

西洋政治思想の傳來

民選議院設立の運動　明治維新の頃から、明治十年頃までのわが國民の政治思想に力強い影響を及ぼしたものは、英・米・佛・獨の諸國であつた。そして自由民權思想が盛んに行はれ、副島種臣・後藤象二郎・板垣退助・江藤新平等は、國運を發展せしめるのには、天下の

一八七四年　公議を伸張せしむべきであるとなし、明治七年一月、民選議院設立の建白書を朝廷に呈した。これに對する反對論もまた盛んに起つたが、大勢は設立を促進する方に傾いた。明治天皇はこれをみそなはして明治八年四月、詔を下したまひ、元老院を設けて立法の源を廣め、大審院を置いて審判の權を鞏くし、また地方官會議を召集して民情を通じ、公益を圖らしめられた。

一八七五年　元老院・大審院設置

一八七九年　地方官會議召集

地方官會議臨御

ついで政府は、同十二年三月、府縣會を開いて、民選の議員をして、その府縣の經費などを議せしめ、徐ろに立憲政體を打ち立てる階梯をつくつていつた。一方國民の間には、西南の役後政治思想が大いに進み、政府と意見を異にするものは、言論によつてその主張を貫かうとするやうになつた。中にも板垣退助は、鄉里土佐にあつて同志のものと共に愛國社を組織し、明治十三年四月、八萬七千餘人の連署せる國會開設請願書を太政官に提出した。天皇は、またこの形勢をみそなはし明治十四年十月、勅諭を下され、明治二十三年を期して國會を開かせたまふべき旨を天下に宣せられた。こゝにおいて民權論者は、大いに悅び新たに政黨組織に著手し、板垣退助は、同年、自由黨を組織してその總理となり、大隈重信は、明治十五年改進黨を組織して、その總理となつた。自由黨は概して急進的で、米・佛の思想を基調とし、改進黨は概して漸進的で、英國の思想を基調としたものであつた。

一八八〇年　板垣退助の愛國社

一八八一年　國會開設の請願

一八八八年　國會開設の勅諭

自由黨

改進黨

板垣退助

大隈重信

内閣制度

憲法取調局

一八八二年

一八八四年

制度取調局

一八八五年

内閣總理大臣

内閣制度　政府は曩に明治九年、元老院の中に憲法取調局を設けて、憲法を取調べさせたが、國會開設の詔が下つた後、一層廣く各國の情況を視察するため、明治十五年、參議伊藤博文をして、西園寺公望以下の隨員を伴ひ、歐洲諸國に赴かしめた。博文等は命を奉じて渡歐し、英・佛・獨・墺の諸國を訪ね、憲法政治の實況を視察し、また各國の學者に就いて研究を重ねた。その歸朝の後、同十七年政府は制度取調局を宮中に置き、博文を長官として、憲法その他の諸令を起草させた。既にして明治十八年年、政府は大いに官制を改め、大寶令に倣つて置かれてあつた官制を廢し、新たに内閣制度を創立し、内閣總理大臣及び外務・内務・大藏・陸軍・海軍・司法・文部・農商務・遞信の各大臣を置いて相共に内閣を組織し、天皇を輔けまゐらせて、國務を掌らしめ、また別に宮内大臣・内大臣・宮中顧問官を置いて皇室に奉仕せしめることとなした。そして伊藤博文は内閣總理大臣に任ぜられ、宮内大臣を兼ね、尚ほ憲法制定のことを主宰した。ついで同二十一年、天皇最高の顧問府として、樞密院が設けられ、博文はまたその議長に任ぜられた。それより天皇は憲法の草案を樞密院に下して愼重に審議せしめられ、始終親臨して多くの顧問官等の意見をお聽きになり、つひにこれを欽定せられるに至られた。

2544

2545

2548

最初の内閣

内閣總理大臣　伊藤博文（長州）
外務大臣　井上馨（長州）
内務大臣　山縣有朋（長州）
大藏大臣　松方正義（薩州）
陸軍大臣　大山巖（薩州）
海軍大臣　西鄕從道（薩州）
司法大臣　山田顯義（長州）
文部大臣　森有禮（薩州）
農商務大臣　谷干城（土州）
遞信大臣　榎本武揚（舊幕臣）

國務大臣

宮内大臣
内大臣
宮中顧問官

一八八八年

樞密院

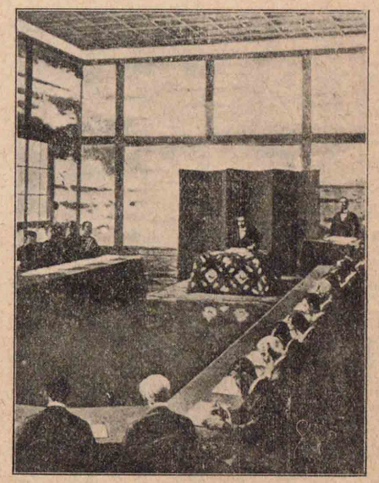
憲法會議

憲法を審査する會議室は、廣間の上手に玉座があり、その背後に金屏風を建て、議場には四字形に卓子を竝べ、玉座はその開いた眞中にあり、玉座の右手には皇族席があり、つゞいて内大臣三條實美・内閣總理大臣黑田清隆以下各國務大臣の席があり、玉座の左手には議長伊藤博文・書記官長井上毅・書記官伊東巳代治・同金子堅太郎・副議長寺島宗則及び樞密顧問官の席があつた。そして大臣席と樞密顧問官席とは

帝國憲法の發布

〔一八八九年〕

帝國根本の大法



憲法會議

隣合せになつてゐた。この圖は伊藤議長が起立して、議案の説明をしてゐるところである。

帝國憲法の發布　明治二十二年二月十一日、紀元節の佳辰を以て、待ちに待つた帝國憲法發布の大典が擧げられた。この日天皇は賢所・皇靈殿・神殿に御拜あらせられて、帝國憲法の制定を皇祖皇宗の神靈に告げたまひ、更に皇后と共に正殿に出御せられ、皇族・大臣その他の官民及び外國公使等を召されてその發布の式を擧げたまひ、御親ら帝國憲法を内閣總理大臣黑田清隆にお授けになられた。帝國憲法は七章・七十六條より成れる帝國根本の大法であつて、天皇統治の大權と、臣民の權利・義務とを定め、臣民に參政權を分ち與へられたものであり、その發布はわが國の政治の一大進歩であつたから、國民は擧つて祝意を表し、歡呼の聲が四方に滿ち溢れた。同時に皇室典範もまた制定せられた。これは皇位繼承・踐祚・卽位・立后・立太子・攝政など皇室に關する事項を定めたまへるものであり、これによつて皇室の基礎はいよ〳〵固く、天地と共に窮りなく榮えさせたまふことを明らかにせられたものである。

政治上の一大進歩

皇室典範の制定

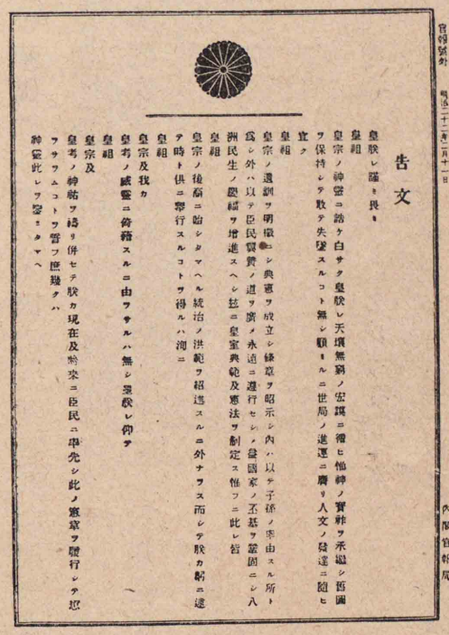
帝國憲法の特質

御告文

帝國憲法の特質　明治天皇は、皇室典範及び憲法御制定に就ての御告文に、

皇朕レ謹ミ畏ミ
皇祖
皇宗ノ神靈ニ誥ケ白サク皇朕レ天壤無窮ノ宏謨ニ循ヒ惟神ノ寶祚ヲ承繼シ舊圖ヲ保持シテ敢テ失墜スルコト無シ顧ミ

憲法發布勅語



官報號外　明治二十二年二月十一日　内閣官報局

告文

朕謹テ謹ミテ皇祖皇宗ノ神靈ニ誥ケ白サク皇祖皇宗ノ神靈ニ誥ケ白サク皇祖皇宗ノ遺訓ニ遵ヒ惟神ノ寶祚ヲ承繼シ皇運ヲ保持シテ敢テ失墜スルコト無シ顧ミルニ世局ノ進運ニ膺リ人文ノ發達ニ隨ヒ宜ク

皇祖皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニシ典憲ヲ成立シ條章ヲ昭示シ内ハ以テ子孫ノ率由スル所ト爲シ外ハ以テ臣民翼贊ノ道ヲ廣メ永遠ニ遵行セシメ益國家ノ丕基ヲ鞏固ニシ八洲民生ノ福祉ヲ增進スヘシ茲ニ皇室典範及憲法ヲ制定ス恒フニ此レ皆

皇祖皇宗ノ後裔ニ坐シテマヽ統治ノ洪範ヲ紹述スルニ外ナラス而シテ朕カ躬ニ逮ヲ時ト倶ニ運行スルコトヲ得ルハ洵ニ

皇祖皇宗及我カ皇考ノ威靈ニ倚藉スルニ由ラサルハ無シ朕謹シテ仰テ

皇祖皇宗及皇考ノ神靈ニ誥ケ併セテ朕カ現在及將來ニ臣民ニ準先シ此ノ憲章ヲ履行シテ怠ラサルコトヲ誓フ庶幾クハ神靈此レヲ鑒ミタマヘ

内閣官報局

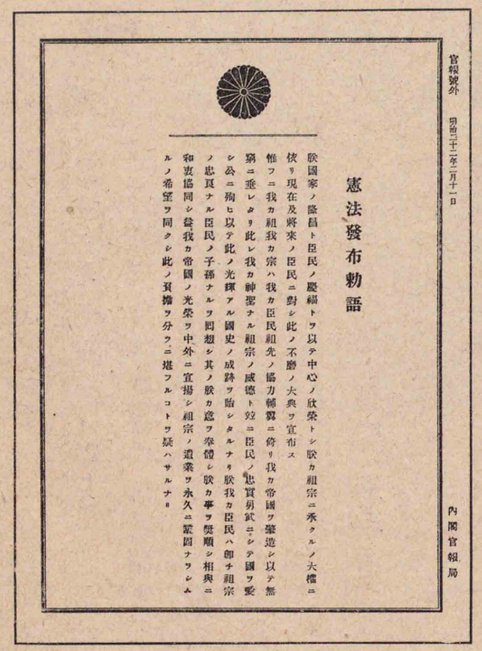
皇室典範及び憲法制定御告文
（官報號外）

ルニ世局ノ進運ニ膺リ人文ノ發達ニ隨ヒ宜ク皇祖皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニシ典憲ヲ成立シ條章ヲ昭示シ内ハ以テ子孫ノ率由スル所ト爲シ外ハ以テ臣民翼贊ノ道ヲ廣メ永遠ニ遵行セシメ益國家ノ丕基ヲ鞏固ニシ八洲民生ノ福祉ヲ增進スヘシ茲ニ皇室典範及憲法ヲ制定ス

と宣ひ、また憲法發布勅語には、

朕國家ノ隆昌ト臣民ノ慶福トヲ以テ中心ノ欣榮トシ朕カ祖

宗ニ承クルノ大權ニ依リ現在及將來ノ臣民ニ對シ此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス



官報號外　明治二十二年二月十一日　内閣官報局

憲法發布勅語

朕國家ノ隆昌ト臣民ノ慶福トヲ以テ中心ノ欣榮トシ朕カ祖宗ニ承クルノ大權ニ依リ現在及將來ノ臣民ニ對シ此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス

惟フニ我カ祖我カ宗ハ我カ臣民祖先ノ協力輔翼ニ倚リ我カ帝國ヲ肇造シ以テ無窮ニ垂レタリ此レ我カ神聖ナル祖宗ノ威德ト竝ニ臣民ノ忠實勇武ニシテ國ヲ愛シ公ニ殉ヒ以テ此ノ光輝アル國史ノ成跡ヲ顯シタルナリ朕我カ臣民ハ即チ祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ其ノ朕カ意ヲ奉體シ朕カ事ヲ奬順シ相與ニ和衷協同シ益我カ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同クシ此ノ負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハサルナリ

憲法發布勅語（官報號外）

ト竝ニ臣民ノ忠實勇武ニシテ國ヲ愛シ公ニ殉ヒ以テ此ノ光輝アル國史ノ成跡ヲ貽シタルナリ朕我カ臣民ハ即チ祖宗ノ

忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ其ノ朕カ意ヲ奉體シ朕カ事ヲ奬順シ相與ニ和衷協同シ益〻我カ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同クシ此ノ負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハサルナリ

と宣はせられた。謹みてこれ等の御言葉を拜讀すれば、わが欽定憲法は、祖神崇敬の信仰に基ける國體の精華を基とし、敬神愛民の深厚なる聖慮によりて成れるものであつて、彼の歐米諸國の憲法が、しば〳〵人民本位のものであるのに比し、その本質において大いに異つてゐる。かくして、わが立憲政治の基礎は確立し、國運はいよ〳〵隆昌に向つた。

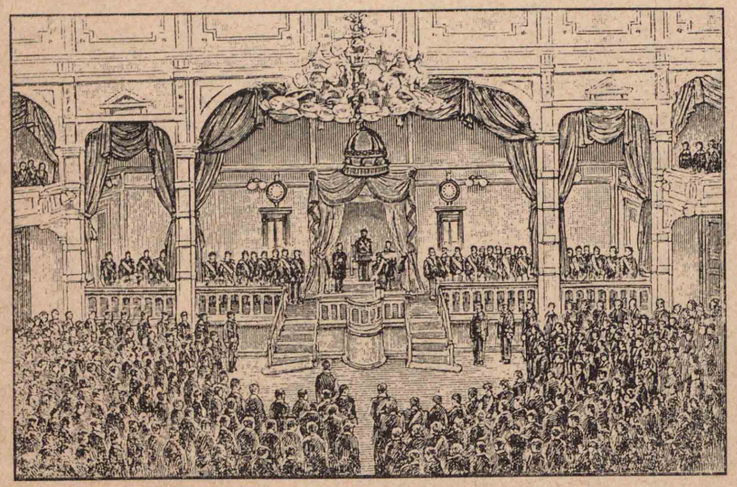
歐米諸國の憲法

帝國議會の開設　帝國憲法と共に、これに附屬する議院法・貴族院令・衆議院議員選擧法なども公布せられ、翌明治二十三年十一月二十五日、帝國憲法の規定によつて、帝國議會は始めて召集せられ、

帝國議會の開設

一八九〇年

貴族院
衆議院



第一回帝國議會開院式（五姓田芳柳筆）

同月二十九日、天皇は親臨してその開院式を擧行あらせられた。帝國議會は、貴族院・衆議院の二院より成る立法の府である。かくして立憲政體の實が全く備はり、萬機公論に決するやうになつた。

この圖は、第一回帝國議會開院式に方り、明治天皇より親しく勅語を賜はる光景である。式場は貴族院、正面中央は玉座である。玉座の御椅子の前に起立したまふは天皇でいらせられる。その御前に進んで勅語を拜受してゐるのが貴族院議長

伯爵伊藤博文、下段前面向つて左、獨り前に出てゐるのが衆議院議長中島信行である。議員席は左右に分れ、向つて右方貴族院議員、同左方衆議院議員の一同が、今や一齊に椅子を離れて起立し、直立不動の姿勢を取つてゐる。正面左右二個の大時計の示してゐるのは、午前十一時十五分、實に式場最高潮の刹那の光景である。帝國議會議事堂は、その後たび〳〵變り、今は別の處に立派な建築が出來てゐる。

立憲治下の女性

男子と同樣の教育

男女同權の思想

立憲治下の女性　封建社會においては、家が最も重要視せられ、婦人は終生、家のためのみに働く有樣であつたが、明治維新の後、士農工商と呼ばれた差別はなくなり、國民は齊しく皇恩に浴することとなり婦人の立場も自ら改まつて來た。加ふるに學制が定まり、女子も男子と同樣の教育を受けて、智能を啓發せられ、また西洋文化が盛んに輸入せられるのに伴ひて男女同權の思想が鼓吹せられ、婦人の地位は大いに高まるに至つた。殊に立憲政治が確立し、憲法をはじめ、民法その他の法典が備はり、婦人は國法によつて、その身分を保障せられ、安心して生活を樂しみ得るのは、偏に限りなき皇恩の賜である故に立憲治下の婦人は、朝夕これを仰ぎたてまつりて、良妻賢母として家庭を健全に發達せしめるのと共に、常に學問・修養に心を潛めて、社會の情勢・國運の推移を理解し、内にしては子女の教育に努め、外にしては君國のために、奉公の誠を致すべきである。

婦人と社會事業

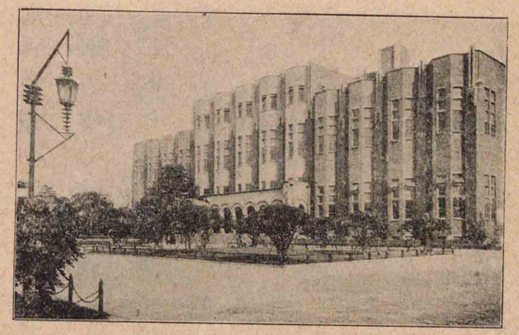
婦人は長い間の慣習により、家庭の内部にのみ閉ぢ籠り勝であつたが、世の中の進歩するに隨ひ、社會生活の各方面に、婦人の力を待つ事柄が次第に增加して來た。それで明治時代において、既に學校を建て、公共團體を設け、社會事業に力を盡す婦人が多く現れた。されば今後の婦人は、家を生活の根據となしつゝ、一層深く社會の事柄を理解するやうに自己の修養に努めなければならない。

教育の普及
一八七二年
義務教育
聖諭の御言葉
中等教育

第十二章　教育勅語の御下賜と現代文化の發展

教育の普及

凡そ精神的文化の淵源は、教育の普及に存してゐる。それ故政府は大いにその振興を圖り、(1)明治五年學制を布いて、義務教育の方針を明らかにし、すべての國民をして學校教育を受けしめるに至つた。そのときの聖諭には、今後一般人民をして必ず學を修めしめ、「邑ニ不學ノ戸ナク家ニ不學ノ人ナカラシメンコトヲ期ス」と仰せられてある。(2)中等教育も盛んになり、中學校・高等女學校などは全國各地に


東京帝國大學圖書館

師範教育
高等教育
實業教育
女子教育
女子教育の進歩

隈なく設立された。(3)これ等の教育に從事する教育者は、府縣立の師範學校と官立の高等師範學校などで養成されてゐる。(4)高等教育は著しく進歩し、高等學校・帝國大學・農工商醫等の單科大學並に專門學校をはじめとして、私立大學も數多く出來た。(5)實業教育もまた非常に發達した。(6)女子教育の普及も驚くべき程で、その高等教育の機關も次第に備はりつゝある。

昭憲皇太后華族女學校行啓

昔の女子教育は、家庭と寺子屋とに限られてをつたが、明治の末頃には、全國各地に多くの高等女學校があり、各府縣には女子師範學校、東京・奈良には女子高等師範學校があり、私立の專門學校も多く出來た。爾來、今日に至り、女子教育は驚くべき長

足の進歩をなした。前頁の圖は、明治十八年、昭憲皇太后が、教育奬勵の思召を以て、華族女學校（今の女子學習院）に行啓あらせられ、その開校式に臨ませたまへるときの御有様である。

教育勅語の御下賜

明治初年の風潮

教育勅語の御下賜

これ等各般に亙る教育は、明治二十三年十月三十日、明治天皇の御下賜になられた教育に關する勅語の御趣旨を遵奉して行はれてゐるのである。これより先、明治初年の頃、西洋文化を取入れることに急なる餘り、教育界においても、國情を異にする歐米諸國の書物を、そのまゝ飜譯して、わが國の教科書となすものもあり、これに對して、國粹を尊重すべしと論ずるもの現れ、思想界の混亂甚しく、さながら狂瀾怒濤の涌き立つがごとき觀があつた。明治天皇は、これに就いて深く宸襟を惱まさせたまひ、局に當る者も、聖意を體して思想の善導に努めたが、一方、條約改正問題の紛糾に伴ひ、歐化主義が盛んに行はれ、それと國粹保存論者

思想界の混亂

明治天皇の御軫念

教育勅語の御下賜

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵フ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ成其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

源希典謹書

教育勅語（乃木希典筆）

との間の論爭は、殆んどとどまるところが知られなかつた。それ故、心あるものは、夙に思想界の健全なる指導に就いて深憂を懷いてゐたところ、天皇はこの情勢をみそなはし、教育に關する勅語を御下賜ありて、以て古今中外に通ずる大道を御明示あらせられたのである。こゝにおいてわが教育の向ふべき大方針は確立し、國民上下

學問の進歩
印刷術
獨創の研究
世界文化創造の使命
文學の趨勢

は擧つて聖訓を遵奉しまゐらせ、歩武堂々として肇國以來の道を濶歩するに至つた。わが國教育の隆運は、偏にこの御指導を仰ぎたてまつるところに存するのである。

學問の進歩　教育が盛んになるのにつれて、印刷術も大いに發達し、學問の進歩を促した。そして學界の傾向は、初めの間は、西洋諸國の學問を取入れることに忙はしかつたが、明治二十年頃より、外國の知識を同化して獨創の研究をなすものが輩出し、醫學上の發見や軍器・火藥の發明などに立派な業績を擧げるに至つた。また自國及び東洋諸國の文化の研究が著しく進歩し、國民の自尊心が大いに高まり、わが國は東洋文化と西洋文化とを融合して、新たに世界文化を創造すべき重要な使命を有することの自覺が生じた。そして支那・印度・暹羅などから、留學に來るものが增加した。

文學の趨勢　明治の初めには、著しい文學の作品はまだ容易に

寫實主義
西洋文學の研究
小說・戲曲
尾崎紅葉
幸田露伴
夏目漱石
評論
高山樗牛
俳句
正岡子規
新體詩
島崎藤村
土井晚翠
劇

現れなかつたが、坪内逍遙が寫實主義を主張したのが小說革新の動機をなし、その紹介せる英吉利文學は、森鷗外の紹介せる獨逸文學と共に、わが文壇に西洋文學の研究を盛んならしめた。その影響を受けて、小說・戲曲等に新機軸を出だすものが多くなり、中頃より後、尾崎紅葉・幸田露伴は文壇の明星と呼ばれて小說界に雄飛し、ついで夏目漱石の名篇あり、高山樗牛は縱横の才筆を揮つて評壇に馳驅し、俳句では正岡子規は新たに一派を開き、新體詩では島崎藤村・土井晚翠などが盛んに新しい詩界を開拓した。また劇壇では舊い歌舞伎劇のほかに新劇及び西洋劇が起り、その間に多くの名優

坪内逍遙

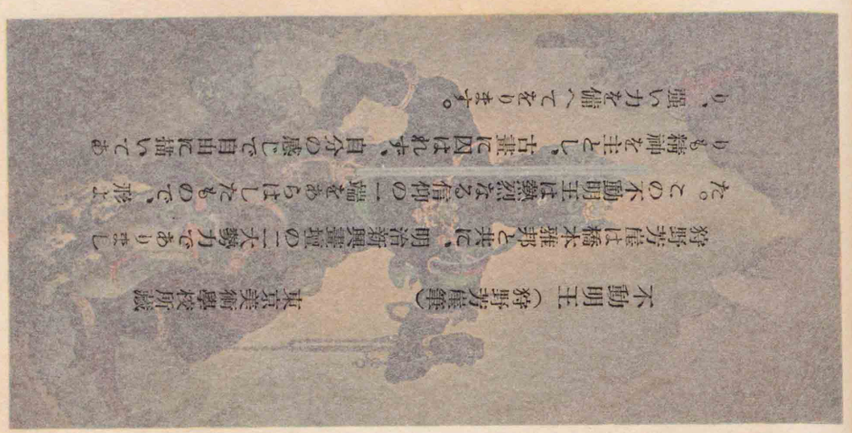
高山樗牛

歌壇
映畫
美術の發達
美術復興の氣運
日本畫
狩野芳崖
橋本雅邦
川端玉章
下村觀山
横山大觀
竹内栖鳳
山元春擧
洋畫

を出した。明治の末年頃より現今に亙り、小説は幾たびもその作意に進展を示しつゝ、次第に大衆化してゐる。歌壇もまた造語及び思想共に自由にして新鮮なることを尊び、長短種々の詩形が行はれてゐる。映畫界の進歩は最近殊に著しくなつた。要するにすべてが國民大衆の鑑賞に訴へる傾向をもつて發達してゐるのである。

美術の發達　明治の初め頃、わが固有の美術は、殆んど顧みられなかつたが、明治十二・三年頃から、古美術保存の急務が唱へられ、美術復興の氣運が盛んになつた。日本畫には、狩野芳崖・橋本雅邦・川端玉章などの巨匠が出て多くの大作を成した。雅邦の門下には下村觀山・横山大觀あり、京都の畫壇には竹内栖鳳・山元春擧あり、一般に畫家は古來の諸流派の畫法を研究するほか、洋畫の長所をも參考して、新しい畫風を開くことにつとめる傾があつた。洋畫に

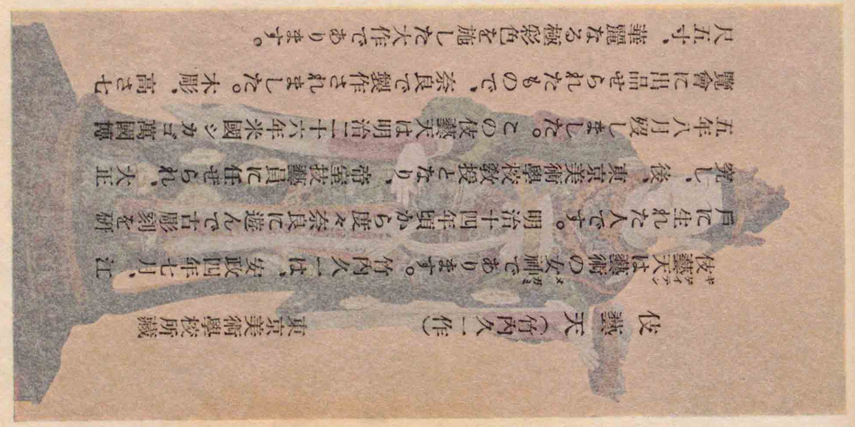
不動明王



不動明王（狩野芳崖）
東京美術學校所藏

狩野芳崖は橋本雅邦と共に、明治新興畫壇の一大勢力であります。

たゞこの不動明王は鬱然たる信仰の一端をあらはしたもので、形よりも精神を主とし、古法に囚はれず、自分の感じで自由に描いてあります。



伎藝天（竹内久一作）
東京美術學校所藏

伎藝天は明治二十六年米國シカゴ萬國博覽會に出品せられたもので、奈良で製作された大作であります。

伎藝天は婦人の姿で、華麗なる極彩色を施した大作であります。

月に生れた人であります。明治十四年頃から度々奈良に遊んで古彫刻を研究し、後、東京美術學校教授となり、帝室技藝員に任ぜられ、大正五年八月没しました。

伎藝天

歌壇
映畫
美術の發達
美術復興の氣運
日本畫
狩野芳崖
橋本雅邦
川端玉章
下村觀山
横山大觀
竹内栖鳳
山元春擧
洋畫

を出した。明治の末年頃より現今に亙り、小説は幾たびもその作意に進展を示しつゝ次第に大衆化してゐる。歌壇もまた造語及び思想共に自由にして新鮮なることを尊び長短種々の詩形が行はれてゐる。映畫界の進歩は最近殊に著しくなつた。要するにすべてが國民大衆の鑑賞に訴へる傾向をもつて發達してゐるのである。

美術の發達　明治の初め頃、わが固有の美術は、殆んど顧みられなかつたが、明治十二・三年頃から、古美術保存の急務が唱へられ、美術復興の氣運が盛んになつた。日本畫には、狩野芳崖・橋本雅邦・川端玉章などの巨匠が出て多くの大作を成した。雅邦の門下には下村觀山・横山大觀あり、京都の畫壇には竹内栖鳳・山元春擧あり、一般に畫家は古來の諸流派の畫法を研究するほか、洋畫の長所をも參考して、新しい畫風を開くことにつとめる傾があつた。洋畫に

不動明王（狩野芳崖筆）
東京美術學校所藏

狩野芳崖は橋本雅邦と共に、明治新興畫壇の二大勢力であり、その不動明王は熱烈なる信仰の一端をあらはしたもので、形よりも精神を主とし、強い力を備へてをります。古畫に囚はれず、自分の感じで自由に描いてあり、

究し、後、東京美術學校教授となり、帝室技藝員に任ぜられ、大正五年八月没しました。この伎藝天は明治二十六年米國シカゴ萬國博覽會に出品せられたもので、奈良で製作されました。木彫、高さ七尺五寸、華麗なる極彩色を施した大作であります。

伎藝天（竹内久一作）
東京美術學校所藏

伎藝天は藝術の女神であります。竹内久一は、安政四年七月、江戸に生れた人で、明治十四年頃から度々奈良に遊んで古彫刻を研

た。この不動明王は熱烈なる信仰の一端をあらはしたもので、形よ

り、敢て七を論ずるのであります。

りも藏師を生ずつ。古藏に因れりて、自分の藏ずから自出に藏ずつもの。この不動明王は慈悲なる面的の一藏をあらはすものか、所ま

密教美術は藏本藏共ずに共に、即密禪眞藏藏の二大藏七ずもりまつ

不動明王（密教美術）　東京美術學校藏

只五十、華嚴なる藏密句を藏ずつ大行ずもります。

寶會の出品ずるものか、茶具か數行ずりまつか。水瓶、高ずカ五年人日國ずまつか。この如來天は即密二十六年米國ッセ上寫國藏

從ず、密、東京美術學校藏藏ずなり、密定共藏自ずに用ずるり、大五自ずに生りずつ人ずず。即密十四年四年ずる鋼メ茶具ずに藏ずつ古瓶陸ず拙

如來天（竹内久一作）　東京美術學校藏

如來天は密教の本尊であります。竹内久一は、武蔵国生れ、江

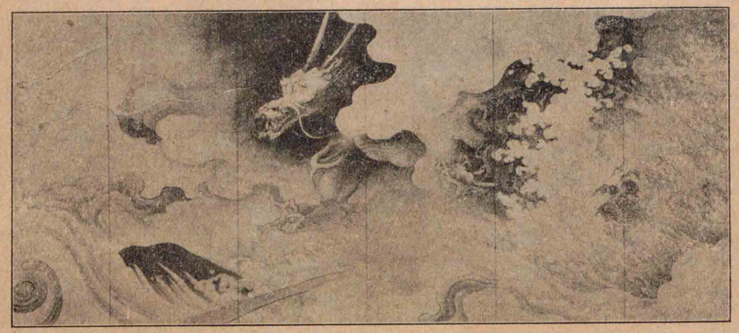
不動明王

如來天

小山正太郎
淺井忠
黒田清輝

彫刻
高村光雲
竹内久一

建築及び工藝



橋本雅邦筆屏風畫

は小山正太郎・淺井忠などが出で、黒田清輝に至つて清新な畫風を起し、美術學校の洋畫科からは、新進の作家を多く畫壇に送り出した。彫刻には高村光雲・竹内久一などがあり、殊に木彫のほか、西洋風の彫刻が著しく發達した。この外、建築・染織・陶器なども西洋風の影響を受け、一面には古雅な風を傳へると共に、他の一面には新規な趣を加へて進んで來た。

そしてわが國產の中、西陣織・七寶燒のごとき工藝品は、世界の賞讃を博するやうになつた。明治四十年、文部省は美術保護のため、毎年展覽會を開催し、大正九年、

帝國藝術院の設立

帝國美術院が設けられて、一般民衆に美術趣味を普及せしめることに大なる貢獻をなした。最近昭和十二年、時代の推移に伴ひ、美術文學・音樂・書道等の各方面から、朝野の人材を網羅した帝國藝術院が設立せられた。

現今の趨勢

現今の趨勢

現今において、わが國民文化は、更に多大の進歩發達を遂げた。

経濟方面

(イ)先づ經濟方面に就いて見るならば、通信機關の進歩、交通機關の發達、農法の改善、大工業の勃興、商業の發展、貿易の盛大等、いづれも日進月歩駸々としてとゞまるところを知らず、殊に數年來、わが商品の世界市場における販路は著しく擴大せられ、諸外國を驚かしてゐる。

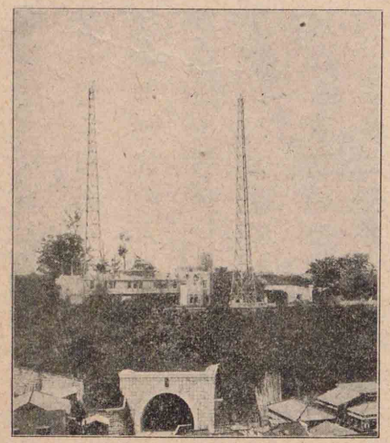
政治方面

(ロ)次に政治方面に就いて見るならば、わが國は世界大戰に參加し、聯合國の一員として活躍し、つひに世界五大强國の班に入り、更に太平洋問題において、英・米兩國と踵を接し、肩を比べて角逐するやうになり、東洋平和の盟主たる地位を確保

思想方面

するに至つた。

(ハ)更に思想方面に就いて見るならば、先づ教育機關の充實著しく、各種の學校は非常に增加し、實業教育も、軍事教育も次第に徹底し、成人教育は現に社會に活動せる人々に對し、多大の效果を齎し、ラヂオもまた教育機關として有效なる役割を果してゐる。印刷出版事業の進歩も特筆すべきものであり、新聞・雜誌・書籍等の驚くべき增加により、國民の知見は日に月に啓發され、思想界は新しみを帶びて發達し來り、非常に世界的になつて來た。殊に最近、國民的自覺の高まるに隨ひ、國體を明徵にし、日本精神を宣揚する思想運動が活潑に行はれ、國運興隆の將來を約束するがごとき觀がある。



東京中央放送局

國民文化の特質

健全なる日本精神の指導

祖神崇敬の信仰

敬神愛民

敬神忠君

國民文化の特質　政治・經濟・思想の三方面に亙り、國民文化を指導したものは、實に健全なる日本精神であつた。日本精神の中心は祖神崇敬の信仰である。最高至貴の祖神崇敬は、天照大神崇敬である。天照大神は永遠の存在、不朽の生命でおはしまし、神德昭々として四海に光被したまふ。その直系の御神裔にわたらせらるゝ御歷代の天皇は、卽ち現人神でいらせられ、敬神愛民の聖慮到らぬ隈もおはしまさず、國の內外に亙つて人類の平和と康福とを軫念あらせられる。臣民は敬神忠君を以て生活の信條となし、臣民たる責任の全部を自己の一身に負擔し、すべてを擧げて君に捧げたてまつることを終生の悅びとしてゐる。これ實に日本人のみが有するところの精神であつて、世界列國にその類を見ることが出來ない。されば現在の國民文化は複雜にして豐富を極めてゐるけれど、これを分解すれば、その中心勢力をなすものは、依然として肇國以來の祖神崇敬の信仰に基く文化であることを知り得るのである。儒教を主とする支那文化のごとき、佛教の文化のごとき、キリスト教の文化のごとき、近世歐米諸國の物質的文化のごとき、幾多の外來文化は、悉くこの固有の文化の裡に攝取せられ、融合せられ、醇化せられ、變質せしめられて、わが血肉となり、以てわが國民文化を健全に成長せしめる榮養素となつたのである。われ等は現在及び將來においても、この強大なる同化力に信賴し、教育に關する勅語の御趣旨を奉體して、健全なる日本精神を涵養し、これに基いて、政治並に經濟をも亦健全に發達せしめようと期するのである。

外來文化の醇化

明治時代における國威の發揚
人口の增加
歲費の增加
世界大戰とわが國際的地位

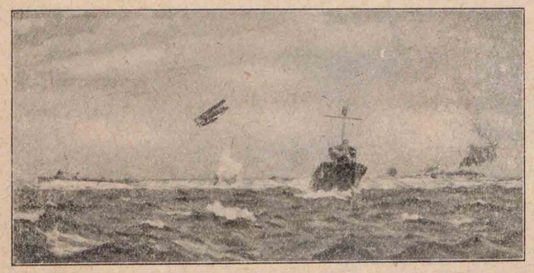
第十三章　現代の大勢と女性の覺悟

明治時代における國威の發揚　明治維新の後、國威は大いに海外に發揚し、亞細亞大陸東方の海上にある蕞爾たる一小國として外人の眼に映じたものが、その末年には、琉球・千島群島・宮古群島・八重山群島・臺灣・澎湖島・北緯五十度以南の樺太島及びその附近の諸島、並びに朝鮮半島を含む領土を有するに至り、人口も明治初年には三千萬人内外であつたのが、その末年には既に六千萬を凌ぎ、歲費は明治初年には三千萬圓餘に過ぎなかつたが、その末年には二十倍以上の額に上つた。今日世界におけるわが國際的地位の高いのは、全く明治時代の基礎が存するからである。

世界大戰とわが國際的地位　大正時代に至り、わが國は、世界大

五大强國
三大海軍國
ワシントン會議
軍備の競爭

戰に參加して太平洋・印度洋をはじめ、遠く地中海の海面にも活躍し、聯合諸國と共に平和の克復に努力し、講和會議に當つては、英・米・佛・伊と共に「主なる聯合國」として重きをなし、爾來、五大强國の一として國際上に高い地位を占め、殊に海軍では英・米と並んで三大海軍國と呼ばれるやうになつた。そして戰後に出來た國際聯盟においては、常任理事國として世界平和のため、多大の貢獻をなした。


地中海におけるわが海軍の活躍

ワシントン會議　世界大戰の終つた後も、各國の軍備競爭は容易にやまず不安の空氣が到るところに漂ひ、殊に東亞及び太平洋の問題は、日・英・米間の爭の源となる虞があつた。米國は、これ等の不安を除いて、世界の平

一九二一年

一九二二年

海軍制限

太平洋諸島の防備制限

四國協約

日英同盟の廢棄

和を保たうと思ひ、大正十年[2581]、ワシントン(Washington)において、軍備の制限及び東亞と太平洋とに關する會議を開かうと提議(テイギ)し、わが國及び外七箇國の賛同を求めた。わが國は悦(ヨロコ)んでこれに應じた。會議は同年十一月より翌十一年二月[2582]までつゞき、左のごとき事項を議定した。

(1)海軍制限　日・英・米・佛・伊の五大國は、軍備の競爭を止(ヤ)めるため、現在の海軍主力艦を基礎として、これに三・五・五・一・七五・一・七五の比率(ヒリツ)を定め、各國共に今後十年間製艦を休むことになつた。

(2)太平洋諸島の防備制限　日・英・米の三國は、互に太平洋諸島の防備を現狀維持にとゞめ、これを擴張(クワウチヤウ)しないこととした。

(3)四國協約　日・英・米・佛は、太平洋において領有する島嶼の權利を互に尊重し紛議を生じた場合には、四國の協同會商によつてその解決を圖(ハカ)ることとなした。

(4)日英同盟の廢棄　四國協約の批准(ヒジユン)と同時に、明治四十四年締結された日英同盟は効力を失ふこととした。

支那問題九箇國協約

膠州灣還付

ジュネーヴ會議

一九二七年

(5)支那問題九箇國協約　參加した九箇國は支那の主權と領土とを尊重し、その關稅率改正を承認することとした。

(6)膠州灣還付　尙ほわが國は、膠州灣地方を支那に還付することとした。

この會議で決定された事項に就き、わが國は、不滿なことが少くなかつたけれども、世界平和のため、快(コヽロヨ)くこれを承認したのであつた。

ジュネーヴ會議　昭和の大御代になつてから、わが國際的地位はます〳〵向上し、ジュネーヴ(Genève)及びロンドン(London)の海軍軍備縮小會議においてわが國は重要なる役割を演じた。これより先、米國はワシントン會議で、海軍の主力艦に就いての協定を成し遂げたから、更に補助艦に就いても協定をなさうと思ひ、大統領クーリッヂ(Coolidge)は、自ら主唱となつて、昭和二年[2587]六月、瑞西(スイス)のジュネーヴにおいて、日・英・米三國の會議を開いた。このとき、わが國は使臣を出席させ、協議を重ねたけれども、相互の意見が一致せず、遺憾ながら會議は決裂した。

ロンドン會議

一九三〇年

ロンドン會議　ジュネーヴ會議は決裂に終つたけれども、列國共に建艦競爭の起るべきことを憂ひてをつたので、この度は英國政府が主唱となり、昭和五年(3590)、英國のロンドンにおいて、日・英・米・佛・伊等の諸國は、海軍軍備縮小會議を開いた。わが國はまた使臣を出席させ、種々協議の結果、補助艦の比率を、日六、九・英一〇・米一〇と定め、各國共に批准(ヒジュン)を終つた。わが國はその條項に就いて、不滿足なところもあつたが、世界の平和に貢獻せんがために、これを協定したのである。

東亞の形勢

國際主義

東亞の形勢　世界大戰の後、歐米列强は、各國互に協調を保ち、世界の平和を維持しようと希ひ(コヒネガ)、國際主義(Internationalism)が重んぜられ、諸般の國際會議が開かれ、相互の間の紛爭を協議の上で解決しようとする風が行はれた。國際聯盟や、ワシントン會議や、ジュネーヴ會議や、ロンドン會議などは、この主義に基いたものであつた。

一九二八年

國民主義

昭和三年(3588)、諸國の間に成立した不戰條約も、同じ傾向のものであつた。しかし現實の狀況は必ずしもこれに適應せず、多くの國際的會議も餘り强き權威を有せず、その上各國共、自己の獨立と權益とを確保するためには、結局他力に依賴することなく、自國のことは自ら圖るより他に道なきを以て、別に國民主義(Nationalism)が擡頭(タイトウ)して國際主義と相對するやうになつた。この風潮の間に立ちて、わが國は國際聯盟設置以來、常任理事國として絕えず人類の福祉(フクシ)の增進に盡力し、またワシントン會議や、ロンドン會議において、世界の平和のために、忍び難きを忍んで海軍軍備縮小を斷行し、國際間の協調を保つことに努(ツト)めたのであつたが、東亞の形勢は、この協

支那軍(防毒班と高射砲隊)

支那との關係

調を危くするものが多かつた。先づ支那(中華民國)に就いてこれを見れば、支那は、革命戰後內亂が相つぎ孫文は三民主義を唱へて民衆を指導し、その後蔣介石は南京の國民政府の中心となつて國家統一を主張し、內外の政局を處理するやうになつた。

この國はわが國とは古來親密なる關係あり、わが國は常に善隣の友邦としてこれと提携して、東亞の平和と繁榮とを確保せんと庶幾つてゐるのであるが、支那はその眞意を諒解せず、國內には激しい排日運動が起り、日支兩國間の關係は、とかく圓滿を缺いた。次に露西亞に就いてこれを見れば、世界大戰の初め、わが國は露西亞に多額の

ソヴィエト聯邦の空軍

露西亞との關係

軍需品を供給してこれを援助したので、露西亞は深くこれを德とし、大正五年(2576)、協約を締結して、兩國は相對抗することなく、互に承認せる領土權及び特殊利益の擁護のためには相協議すべきことを約した。

[一九一六年]

然るにその後露西亞は革命によつて共和國となり、わが國との交際は斷絕してゐたが、大正十一年(2582)、勞農社會主義共和國聯邦(Union of Socialist Soviet Republics)が成立してから、國情が次第に安定になり、大正十四年(2585)、わが國はこれと國交を回復し、再び條約國として交際することとなつた。

[一九二二年]

勞農社會主義共和國聯邦を略してはソヴィエト聯邦といふ。ソヴィエト聯邦は昭和三年以來國力充實のため、資源の開發・工業の振興等、產業の發展に努力し、また軍備を整備し、今も尙、その方針を繼續してゐる。

[一九二五年]

滿洲事變

滿洲との關係

滿洲事變　滿洲とわが國との關係を考ふれば、これを遠くしては、古代において、日本民族を構成するに至つた一部のものは、蒙古

滿洲の地位の重要性

滿洲の不安

または滿洲方面より朝鮮半島を經由して、內地に移住したものであるといふ學說があり、これを近くしては、明治維新以後において、日清戰役といひ、日露戰役といひ、わが國運を賭して爭へる大戰は、共に滿洲の曠野を舞臺として行はれたものであつた。蓋し滿洲に他國の大勢力があれば、朝鮮半島は不安動搖を免れず、朝鮮半島が他國に侵迫せられゝば、內地の安全を保つことが出來ないからである。即ちわが國が自己の獨立を保全し、東洋の平和を安定ならしめるために、滿洲における地步を確取することは、絕對的必要であり、國防の第一線は實に滿洲に在りと稱すべきである。然るに清朝滅亡の後、支那の勢力は南北に分裂し、その北方の軍閥の間にも爭が絕えず、滿洲に蟠踞せる張作霖は、機會を見て南下し、北京に入つて軍政府を建て、一時威を振つたが、南方の蔣介石が南京に據つて、北方の軍閥政治を排斥し、その軍の北京に迫るに及び、張作

一九三一年

柳條溝事件と滿洲國の建設

一九三二年

霖は奉天に引揚ける途中で死んだ。爾後、その子張學良は滿洲の政權を繼いで惡政を行ひ、頻りにわが國既得の特殊權益を蹂躙して省みず、またわが國人に對して迫害を加へた。そしてつひに昭和六年九月、わが南滿洲鐵道株式會社經營の鐵道線路を奉天郊外なる柳條溝附近において爆破し、わが守備兵を襲擊するに至つたので、多年隱忍し來つたわが國は、自衞上已むを得ずして起ち、張學良の軍閥を一掃し去つた。こゝにおいて舊政權より離脫して獨立しようとする要望が各地に起り、滿洲・蒙古地方三千萬民衆の安寧と幸福とを確保するために、多くの代表者が集つて熟議を凝らし、昭和七年三月に至り、新に滿

日滿議定書調印

日滿議定書調印

國際的地位の變化

國際聯盟の態度

洲國が建設せられ、もとの清國皇帝たりし宣統帝は、首府新京に迎へられて滿洲國執政となられ、大同と建元せられた。わが國は、滿洲國建設の初より、特別に親密なる友情を以てこれを援助し、同年九月、日滿議定書の調印成り、わが國は列國に先んじて正式に滿洲國の獨立を承認し、滿洲國は、わが國が日支條約等により、滿洲國領土内において有する權益を尊重し、日滿兩國は互に、その領土及び治安に就き、共同防衛の任に當ることを約した。これ實に世界歴史における一大變革であり、滿洲國の健全なる發達は、東洋平和の礎石に外ならないのである。

國際的地位の變化　滿洲事變の起るや、支那は國際聯盟の力を藉りて、自己に有利な解決を得ようとし、わが國はこれに對し、飽くまで日支の直接交渉によつてこれを解決しようとした。よつて聯盟は、特に調査團を派遣して、滿洲及び支那の情況を調査報告せ

一九三三年

國際聯盟脫退

ワシントン條約廢棄通告

一九三四年

二度目のロンドン會議脫退

しめたが、その報告は多くの誤解を含み、到底わが國の容れ得るものでなかつた。然るに聯盟は東洋の實狀に通ぜず、事態に對する認識が足らず、わが國と見解を異にすることが多く、わが國が特に全權委員を派して說明討議せしめたのに拘らず、その態度は、つひに東洋永遠の平和を念とするわが國是に合するに至らなかつた。こゝにおいてわが國は博大なる正義の念に基き、昭和八年三月、敢然として聯盟を脫退し、自主的外交を確立し、國民は內外共に重大なる非常時に際會せることを自覺して、互に勵ましあひながら、世界列國の視聽を一身に集めつゝ、堂々として難局を踏破し、一意專心、國力の充實に努めた。そして時代の進展に伴ひ、往年締結せられたるワシントン條約が、現在のわが國情に適しなくなつたのに鑑み、昭和九年十二月、その廢棄を亞米利加合衆國に通告し、更にまたロンドンにおいて開催せられたる二度目の海軍軍備縮小會議

一九三六年

支那事變
滿洲國の發達

一九三五年

滿ソ國境の紛爭

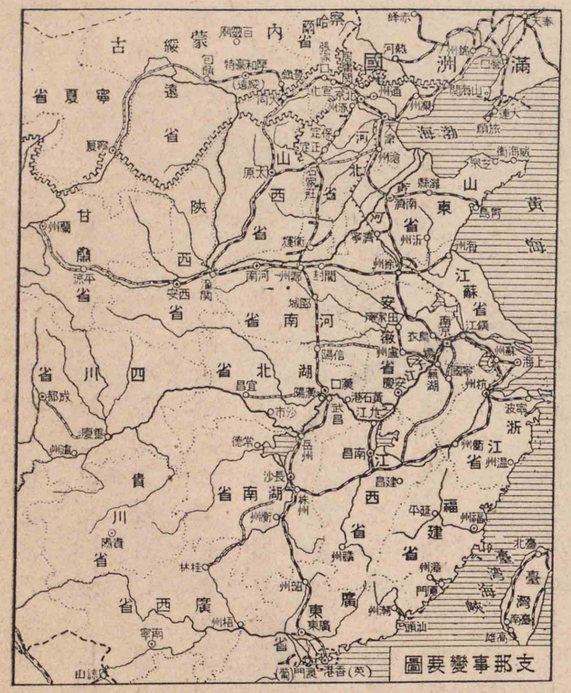
において、わが公正なる主張の容れられざるに及び、昭和十一年一月、またこれを脱退した。かくしてわが國は全く獨自の力量に據つて、國際間に屹立するに至つた。

支那事變　滿洲國は建國以來健全に成長發達し、昭和九年三月、帝政を施行し、年號を康德と改め、その皇帝陛下は、同十年四月、親しくわが國に來訪あらせたまひ、皇室及び國民の懇篤熱誠なる歡迎を受けさせられ、御歸朝の後、特に詔を發して、わが國に信頼する旨を宣せられた。この年、ソヴィエト聯邦は、北滿鐵道を滿洲帝國に賣却し、隨つてその滿洲帝國内における勢力は失はれた。しかし蜿蜒數千粁に亙る滿ソ國境には、境界線の明確ならざる所少なからず、彼我の間に小なる紛爭が絶えず起り、ソヴィエト聯邦の國境警

蔣介石

日獨防共協定

備は日に月に增大せられてゐる。その上ソヴィエト聯邦は、その共産主義を以て世界を攪亂しようとし、歐羅巴諸國に多大の不安を與へてゐるのみならず、亞細亞にては、夙に外蒙古を侵し、支那内部にも勢力を及ぼすに至つたので、わが國は昭和十一年十一月、獨逸と日獨防共協定を結んで、共産主義の防壓を約し、これに備ふるに至つた。その上わが國は多年の方針により、支那と提



支那の抗日運動

昭和七年上海事變

上海停戰協定

北支那における日支協定

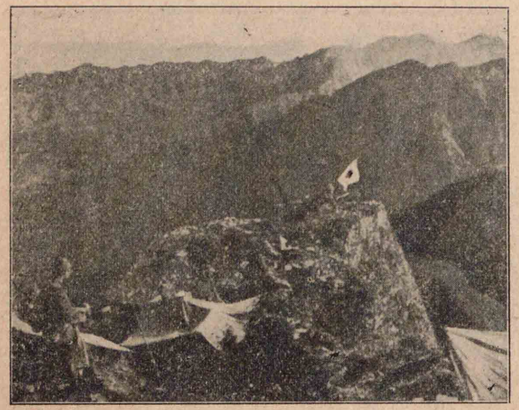
一九三七年

蘆溝橋事件

携して東洋の安定を確保しようと努めたが、蔣介石を中心とする南京の國民政府は、國内の統一を促進するためわが國を排斥し、抗日・侮日の教育を國民に施して事端を繁くし、しば〳〵挑戰的行爲に出たのであつた。これより先、昭和七年、滿洲事變の最中、上海における支那の軍隊は、暴威を振つてわが居留民の安寧を脅し、これを保護するために上陸したわが軍隊を攻撃したので、わが國は自衛のため兵を出し、善戰健闘能く敵を驅逐し、五月、國民政府と停戰協定を結び、やがて兵を撤した。これを上海事變といふ。また北支那では、冀東（河北省北部）冀察（河北省及び察哈爾省南部）地方の安寧に就き、國民政府と協定を結び、以て相互の平和を維持してをつた。然るに支那は東亞の大局に通ぜず、その軍隊は昭和十二年七月、北京郊外の蘆溝橋において、演習中のわが軍隊に對し、突然不法射撃を加へ、國民政府はわが國が事件を擴大せず、穏便にこれを解決しようとするのを

北支戰局

無視し、北支における協定を破つて大軍を北上せしめ、以てわれを脅かした。加ふるに八月に至り、國民政府はまた先年の停戰協定を破つて、大軍を上海に出動せしめ、わが軍隊並に居留民に攻撃を開始した。わが國は、北支においても、上海においても、隱忍自重、切に彼の反省を求めてゐたが、國民政府並にその軍隊が、暴戾にして毫も反省の色なきを見るに及び、終に蹶然として起ち、北支においては、先づ北京・天津の敵を掃蕩し、北しては萬里の長城を越え、幾多の險難を踏破して、察哈爾省・綏遠省の要地を占領し、南しては諸所の敵軍を撃破し、河北省・山西省を席捲して山東省に入



北支山嶽戰

中支戰局

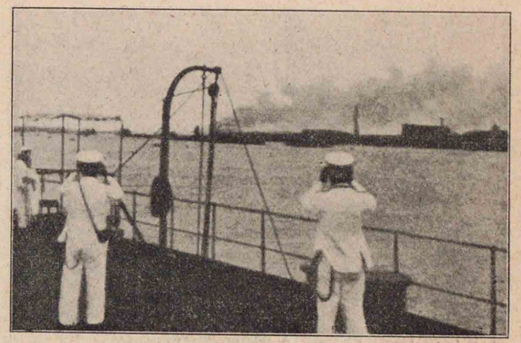
空軍の活躍

支那船舶の航行遮斷

日獨伊防共協定

一九三八年

り、中支においては上海附近において、敵が多年構築せる堅固なる防禦陣地を次々に攻略し、目に餘る大軍を擊破し、更に西進して破竹の勢を以て江南の要地を略取し、十二月、首府南京を陷れた。この戰において空軍の活躍は殊に目覺しく、支那内地の樞要なる軍事地域に爆擊を試み、海軍はまた北支より南支に亙る沿岸における支那船舶の航行を遮斷し、制空權と制海權とを完全にわが手に掌握した。この時に當り、伊太利は不逞なる共産主義を撲滅せんがため、十一月日獨防共協定に參加したので、日獨伊三國の提携が成り、わが國際的地位は、一層重きを加へるに至つた。而して昭和十三年一月、わが政府は國民政



わが艦上より上海戰線展望

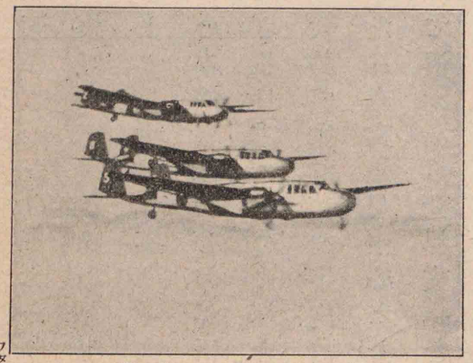
徐州附近の大會戰

戰局の擴大

銃後の國民

わが國の目的

府を相手とせざる旨を宣明し、爾來わが國との和親を重んずる支那の新政權を助け、ます〳〵軍を進めて五月徐州附近の大會戰において敵の大軍を包圍殲滅して大勝を博した。今や戰局は一層擴大せられ、山東省・江蘇省・安徽省・浙江省北部は、すべてわが占領地域となり海軍は揚子江を溯り、陸軍は揚子江の南北を席捲し、空軍もこれに協力して、敵の賴みとする漢口に向つて、一齊に進擊しつゝある。そして銃後の國民は、互に心を一つにして、政治・經濟・思想の各部面に亙り、總動員の體制を取り、以てこの聖戰の目的を達することに全力を傾けてゐる。かくのごとくして、わが國は國民政府並に軍隊の誤れる抗日意識を滅ぼし日滿支三國が相



わが空軍の雄姿

女性の覺悟

われ等の爲すべき事

神德の景仰

世界文化の創造

東洋平和の盟主

携へて、東洋永遠の平和と繁榮とを樂しむやうにしようと努めてゐるのである。

女性の覺悟　われ等は既に國史・東洋史・西洋史を學んで、世界各國の起つたり倒れたりした跡を眺め、わが國體とわが國民性とが如何に優秀なるかを明確に認識し得たのである。われ等がこれより爲すべき事は、從來學修し得たる知識を活用して、(1)わが國體の本義を宣明し、わが臣道の精華を體現し、肇國以來一貫して易らざる日本精神の光輝を發揚し、以て皇運を扶翼したてまつり、天照大神の御神德を宇内萬邦と共に仰ぎまゐらせることに努め、(2)また日本文化を中心として、東洋文化と西洋文化とを攝取融合し、以て博大なる世界文化を創造し、人類永遠の幸福に寄與することである。この大理想を實現せんがために、われ等は先づわが國是たる東洋平和の盟主とならなければならない。そのために、われ等

女性の責任

家庭

社會

國家

は常に隣邦と相親しみ、互に助けあひて、共存共榮の康福を共にせんことを庶幾うて已まざるものである。若しこれを拒み、これを妨げるものがあれば、それは國際正義の蹂躙者であり、東洋平和の破壞者である故に、われ等は敢然として破邪顯正の利劍を揮はねばならなくなるのである。この時に當り、わが國の人口の半を占めるわれ等女性の責任を省るならば、肅然として自ら恐れざるを得ない。凡そわれ等の生活は、その立場によつて、家族と社會と國家とに分れる。その中、家族はわれ等の本據であり、父母に孝、兄弟に友、良妻となり、賢母となり、健全なる家族を構成することは、第一に努むべき大切なる仕事である。しかし家族は孤立するものでなく、廣い社會に包まれて存在するものである故に、朋友相信じ、恭謙己を持し、博愛衆に及ぼし、互に扶け合ひて共榮の悅びを分つことも亦大切である。然るにその社會は、國家の統制によつて、秩序

生活の中心觀念

と安寧とを保つものであり、その國家は天皇陛下を中心と仰ぎたてまつることによつて成立つてゐるのであるから、畢竟するに、われ等の生活の中心觀念は、實に忠君に存するのである。君に忠に、國憲を重んじ、國法に遵ひ、義勇公に奉じ、皇運を扶翼したてまつることは、實にわれ等の最も高尚なる任務である。この最大の任務を果すためには、それ〴〵の家族が、健全に構成せられることが必要である故に、われ等は先づ自己の家族生活を整へ、それより延いて社會生活のために貢獻し、以てわが國家生活の隆昌を期するのである。われ等の責任は、實に重大であると言はねばならない。

非常なる時局

今やわが國家は非常なる時局に直面し、一波去るも一瀾相次いで來り、將來の事は豫測すべからざるものあり、この難局に際會せるわれ等は、日本女性として生れたる恩寵を感謝しつゝ、皇室の御威德を仰ぎまゐらせ、萬邦無比の國體を擁護し、わが國民性の長所を發揮し、臣民たる本分を勤めて、國運進展のために一意邁進すべきである。

女子綜合新國史　高等女學校上級用　終

昭和十三年三月廿八日印刷
昭和十三年四月一日發行
昭和十三年九月五日訂正印刷
昭和十三年九月八日訂正發行

女子綜合新國史

高等女學校上級用

定價金八拾錢

著作權所有

不許複製

著作者　中村孝也

發行者兼印刷者　東京市神田區西神田一丁目三番地　株式會社帝國書院　代表者　守屋紀美雄

印刷所　東京市京橋區銀座西二丁目三番地　三協印刷株式會社

發行所販賣所　東京市神田區西神田一丁目三番地　株式會社帝國書院　振替口座東京六七〇一四番

關西販賣所　大阪市東區横堀四丁目三番地　三宅莊藏書店　振替口座大阪六九番

庫
38
617
広島大学図書
2000081617